

チヨコクリスタルアンドパイナップル

シーズンー ヤカラより愛を込めて

1 チヨコレート

コンビニエンスストアーいしづきマート笠置町店

真理男と真理子、目にも止まらない素早い動きでレジ打ち、品出し、フライヤーの調理等の業務をこなす。バイトの徳留蘭子はオロオロするばかりで何も出来ない。そこへチンピラが入店する。

チンピラ 親父さんはおるか。高田いうもんやけど。

真理男 父さんは…いや店長は事務所にあります。

高田　ちよつと失礼するよ。(中に入ろうとする)

真理子　待ってください。勝手に入られては困ります。

部外者は立ち入り禁止です。

高田　部外者やあらへん。おんどの親父は、元ワイの舎弟や。

真理子　あ、ということは、あなた住之江会の人ね。

高田　せや、それがどうした。

真理男　出ていって下さい。ウチは反社会的勢力の方の入店はお断りです。

高田　失礼なやっちゃな。住之江会は反社やない。れっきとしたコンサルティング会社や。

真理男　それは表向きの話でしょう。

高田　表も裏もあるかい。ガタガタぬかさんとはよ

おやし出せや。おい、梶本さんよ。おるのはわかっ  
とんねん。出て来いや。

真理男　てめえ出ていけってんのがわかんねえの

かよ。(掴みかかろうとする)

高田

おいおい何だねこの店は、善良な客人に対して暴力を振るうのかい。怖いなあ。エックスカッ

コ旧ツイッターに投稿しよっと。

真理男

けっ白々しい。

真理子

真理男、我慢するのよ。先週家族そろって受けたアンガーマネジメントを思い出すのよ。

真理男

そうだ5秒数えるんだ。よし1 2 3 4 5 うんこれで怒りを呑み込んだぞ。もう大丈夫だ。

真理子

そうよ。良くできたわ。平山先生言ってたじゃない。怒りでは何も解決しないって。真理男、あんた

頑張ったわ。その調子よ。

高田

せや、そのオバハンの言う通りや。

真理子

誰がオバハンやねん。オッサンクンロク入れたるか。(掴みかかろうとする)

真理男

姉ちゃん駄目だよ。アンガーマネジメントだよ。

平山先生を思い出すんだよ。(姉を後ろからはがいじめしてくい止める)

事務所から父親で店長の丸男が出てくる。

丸男 何だ。騒がしいな。

真理男 あ、父さん……いや店長。

高田 おう、梶本さん。ここで会ったが百年目。住之江の高田や。覚えとるやろ。

丸男 ええ、エクスカリバー高田さんでしたっけ。

高田 せや、それは関東連合でブイブイいわしとった頃のワイのコードネームや。よう知っとるやないか。そんな事はどうでもええねん。今日ここまで出張ってきたんは他でもない。例のものを返してもらおうか。

丸男 例のものとは。

高田

こいつしらこいやっちなあ。わかっとるやろ。あれやあれ。おんどれが住之江会の会計やっとった頃の裏帳簿や。

丸男

何の事かさっぱりわかりません。

高田

どこまでもしらを切るつもりやな。事務所のパソコンから3年分の会計データを抜きとった形跡がある。ちょうどおんどれが会を辞める前日や。

丸男

私が抜きとったという証拠、つまりエビデンスでもあるんですか。

高田

何がエビデンスやねん、洒落た言葉使いさらして。おんどれしかおらんやろ。ログインできるんは、幹部だけや。

丸男

私は幹部じゃありません。住之江会の会計士をやっていただけです。

高田

言うたな、このタヌキ親父め。いまさら自分はヤクザとは無関係とは虫が良すぎるやないかい。おんど

れも会長から盃もろうとんの、しってんねんど。

丸男  
言ってる意味がわかりませんね。とにかく帰って下さい。警察よびますよ。

引田会長  
(車椅子にのって登場)あいかわらずのタヌキぶりやの。ミスター梶本。

丸男  
あ、これは、ドン引田サラマングー会長。

引田  
おのれ、やつがれの愚連隊時代のコードネームで呼ぶとは、大した度胸やないか。ミスター梶本。警察呼べるもんやったら、呼んでみい。住之江会のしるぎには、おのれもかかわっとったさかい、おのれも同罪や。堀の中の飯は、さぞかし臭いど。やつがれは慣れとるさかいかまわんが、はたしておのれに耐えられるかのう。

丸男  
(スマホを握ったまま立ちつくす)

引田  
なああ、こうしようやないか、ミスター梶本。やつがれももう年じゃ、今さらムシヨには行きとやない。

黙って裏帳簿を渡してくれたら、すぐにでもいんだ  
る。ほれ、これでどうや。(アタッシェケースから  
札束を取り出し、地面に投げる)

丸男

馬鹿にしないで下さい。こんな金拾えませんよ。

引田

馬鹿になどしとらんよ。やつがれも商人じゃ、

銭の有難みはようわかっとる。(もう一束を地面に  
投げる)ほれ、こ×きのように拾わんか。どうや、  
銭がいるんやろ。真の商人やったら、しょうもな  
いプライドは捨てよし。

丸男

(地面に這いつくばって札束を拾おうとする)

真理子

父さん、だめだ。

丸男

そうよ。そんな汚れたお金、拾わないで。

引田

(ワナワナと震えながら、立ち上がる)お帰り下さい。

丸男

ほー、今何と言った。

高田

お引き取り下さい。ドン引田サラマンドー会長。

丸男

おんどれ、ええ根性しとるやないか。ドン引田サラ

マNDER会長の、せっかくのお情けを無にするつもりか。

丸男  
ええ、私はもう住之江会とは一切関わりがありませんから。(スマホを取出し、耳にあてがう)あーもしもし。警察ですか。ちょっと来ていただきたいんですが。

高田  
どうせハッターや。心配無用です。ドン引田サラマNDER会長。

丸男  
ええ、笠置町のいしづきマートです。  
高田  
おうおう、えらいタヌキぶりやのう。

丸男  
実は店にヤクザが来て、大声で意味のわからない事を、怒鳴りちらしてるんですよ。はい。

高田  
さあ、いつまで続くかな。下手な演技が、警察に電話するフリをしながら、その実時報でも聞いとるんやろう。みえみえやぞ。

丸男  
ええ、はい、困ってるんですよ。はい。住之江会で

す。住吉ちゃんいますよ。

スマホ　こちら京都府警。直ぐに参ります。

(パトカーのサイレンの音が聞こえる)

高田　まずい。こいつほんまにサツ呼びやがった。か…

会長。どうしましょ。

引田　しゃあない。いのか。おのれミスター梶本。こんな

事してただで済むと思うなよ。必ず後悔させてやる

ぞ。(高田が引田の車椅子を押し出ていく)

(パトカーの音がどんどん近づいてくる)

真理男　父さん。やったぞ。

真理子　さすがお父さんだわ。

蘭子　す…すごく立派でした。店長。

真理子　あら、蘭子さん。あなたまだいたの。

蘭子　ええ…はい。いました。

丸男　(放心状態で立ったまま)

(パトカーが店の前を通り過ぎて、徐々に遠ざか

る)助かった。偶然パトカーが近くを走っていて。

(手に持ったスマホから「続いての質問をどうぞ。

何かお困りですか」というアナウンスが流れている)

真理男 なんだ父さん。警察呼ぶって言ったのは嘘だったの。

丸男 最新式のチャットGPTだよ。インスタールして

いてよかった。

真理子 そんなのあるんだ。

丸男 人工知能もとうとうここまで進歩したんだ。まるで

人間と会話しているように錯覚してしまう。考え

てみれば怖い世の中だよ。自分が話している相手が

実はコンピュータだったなんて事がおこりうるん

だからな。

真理男 父さん考えすぎだよ。SF小説の読みすぎだよ。

丸男 さ、仕事、仕事。みんな仕事に戻ろう。

(全員仕事に戻る。真理男と真理子は目にも止まら

ぬ早業で仕事をこなす。蘭子は、あいかわらずもた

もたと仕事をする)

暗転

3時間後、着流し姿の渡世人風の男が入店してくる

男 すいやせん。

蘭子 あ、はい。いらっしやいませ。

男 店長さんはおられますかいの。

蘭子 店長ですか。ちょっとお待ち下さい。(奥に向かっ

て)店長。またヤクザが来ました。

男 ワシはヤクザじゃありません。店長の梶本兄者人の  
舎弟の鶴田と申しやす。この度一宿一飯の恩義に報  
いるため、こうして故郷の山口県は岩国を後にして、  
はるばる出張ってまいりましたしだいでごせいやす。

蘭子 ……店長。やっぱりヤクザです。

丸男

何、またヤクザが来たのかい。ウチは反社お断りだよ。：あ、君は鶴田君じゃないか。いったいどうしたんだ。

鶴田

梶本の兄者人。ご無沙汰しておりやした。兄者人が大変苦境に立たされるとの事、風説に聞き及び何かこのワイに手助けできる事は無いかと、駆けつけてまいりやしたしだいです。

丸男

私が苦境に立たされていると、いったいどこで知ったんだね。

鶴田

インターネットのアルバイト募集サイトで知りやした。

丸男

ああ、そうだ。アルバイトがなかなか決まらなくて困ってたんだ。：まあ苦境に立たされるってわけではないが、君はつまり、アルバイト募集サイトを見て、私のために岩国からこの店まで来てくれたってわけかい。

鶴田　へえ、さようなわけです。兄者人のために人肌ぬがせてもらいやす。

丸男　まあまあ。気持ちはありがたいんだが、鶴田君。

アルバイトはもう決まったんだ。(店の商品を棚入れしている蘭子の方を見る)

蘭子　(もたもたして、非常に要領が悪い)

丸男　…まあ、でもあれじゃあなあ。せっかくだし、鶴田君にも働いてもらおうかな。

真理子　ちよっとお父さん。(小声で)この人ヤクザじゃないの。こんな人雇ったらコンプライアンス違反で、いしづきマートの営業本部から注意されるわ。

真理男　そうだよ父さん。どっからどう見てもヤクザだし、それに蘭子さんがいるじゃないか。

丸男　まあ、お前達の言いたい事はよくわかる。しかし、鶴田君は、とてもいいやつなんだ。確かに、以前は住之江会の構成員だったが、よく私の会計の仕事を

手伝ってくれてね。物覚えもすごくいいんだ。

真理子 そんな事言っても。

丸男 まあ、話だけでも聞いてみよう。

鶴田 ありがとうございやす。

丸男 鶴田君、ところで君は、住之江会を辞めた後、いつ

たいどこで何をしていたんだね。

鶴田 ワイは、住之江会を辞した後、イナガワ会系の事務

所におりました。

丸男 稲川会系事務所だって。そりゃ君困るよ。全然足を

洗ってないじゃないか。

鶴田 いえ、兄者人。イナガワカイケイ事務所です。

丸男 知ってるよ。稲川会系事務所だろ。

鶴田 いえ、ですから。

真理子 ちよっと待ってお父さん。この人が言ってるのは、

兵庫県川辺郡猪名川町にある会計事務所の事じゃない。

い。

丸男

なんだそういう事か。ひやひやしたよ。君の言うてるのは、猪名川町にある猪名川会計事務所の事なんだね。

鶴田

ええ、イナガワカイケイの事務所です。

丸男

の、はいらない。の、は付けない方がいいよ。…まあいい。じゃあ君は今も猪名川会計事務所働いているのかい。

鶴田

いえ、そこは半年程で辞めました。その後、ワイは故郷の山口県岩国市に移り住みました。

鶴田

山口県の岩国市にね。そこでどうしていたんだい。駄菓子製造工場働いていました。主にグミを作る会社でした。

丸男

山口県でグミを作る工場働いていたんだね。

鶴田

へい。本社は神戸にありましたが、最近名古屋に移転しました。会社名は…

丸男

言わなくていい。(手で制する)

鶴田 岩国製菓といひます。

丸男 なんだ、普通じゃないか。拍子抜けしたよ。で、その後はどうしていたんだね。

鶴田 以上です。兄者人。

丸男 そうか。なるほど、岩国で君は私の掲載したアルバイト募集広告を見て、私のために駆けつけてくれたんだね。

鶴田 その通りです。

丸男 気持ちがありがたいんだがねえ、鶴田君。ちょうど先月一人あの子を採用したところなんだよ。(棚入れを黙々と続ける蘭子を指差す)

鶴田 ワイは丸男兄者人のために馳せ参じたわけで、アルバイトに雇ってほしいからではありやせん。

丸男 そりゃあ君、言ってる事がおかしいじゃないか。アルバイト募集の広告を見て、ここに来たんだろ。

鶴田 ワイは、兄者人のために、ここで得意のケーキを売

ろうと思うとります。

丸男 ケーキを売るって、君がかい。

鶴田 そうだす。ワイは若い頃大阪の堺でパティシエの見習いをしておりました。ワイの作るケーキは評判が良くて、毎日行列ができておりました。

真理子 あなたパティシエなの。私スイーツ大好き。

真理男 姉ちゃんは、スイーツに目がないんだ。関西にある有名店は、ほとんど制覇したからね。

真理子 ねえ、どこの店。堺で行列ができる店っていったら、ルメールかしら、ひよっとしてカルネだったりして。ねえ、どこななのよ。もったいぶってないで教えて。

鶴田 いや、その、堺です。

真理子 堺のどこ。ヒントを頂戴。

鶴田 堺の田出井町って所です。

真理子 田出井町って確か南海堺東駅の北側のあたりよね。

あんなところに行列のできるケーキ屋さんなんて、あつたかしら。住所を言ってみて。ネットで検索してみるわ。

鶴田 田出井町六ノ一です。

真理子 (スマホの画面を見ながら) 堺刑務所だわ。

丸男 君がパティシエをしていたのは堺刑務所だったのか。若い頃に服役しとりました。刑務作業の一環としてケーキ作りの特別講習がありました。キャッチフレーズは、刑期を終えたらケーキを作ろう。というものでした。

丸男 くだらないよ。

真理子 行列ができるって言ってたじゃないか。

鶴田 刑務所の食堂では、常に行列ができてました。

丸男 それは順番を待っていただけで、行列とは言わないんだよ。鶴田君、悪いがやっぱり君を雇うことは出来ない。帰ってくれないかな。

鶴田　まあ、いっぺんこれを食べてみんしゃい。家でこさえてきましたけえ。(チョコレートケーキを箱から取り出す)

丸男　君の言葉は本当に山口弁なのか。どんどんあやしくなってきたぞ。…まあいい。せつかく作ってきてくれたんなら、一つそのケーキをいただこう。

真理子　お茶を入れるわね。

丸男　(食べた後、暫く沈黙)こ…これは、うまい。こんな

うまいチョコレートケーキ、生まれてこの方五十年間で始めて食べた。もう一つもらっていいか。(箱から取り出してむさぼり食う)

真理男　父さん行儀が悪いよ。そんなに美味しいのか。僕も一つもらっていいかな。

鶴田　どうぞ。御嫡男も召し上がってくださいえ。

真理男　うまい。うますぎるぜ。

真理子　(お茶を配りながら)二人とも大袈裟よ。

鶴田 姐御さんもよければどうぞ。

真理子 じゃあ、ダイエツト中だから、一つだけいただくわ。  
(一口食べた瞬間)何これ、すごく美味しい。甘みの中に程よくビターテイストがマッチングしていて、えもいわれぬ風味を醸し出してるわ。もう一こだけいただくわ。

丸男 おーい蘭子君。その仕事は置いといていいから、君もこっちへ来て食べなさい。

真理子 そうよ蘭子さん。あなたも食べなさい。早くしないと無くなっちゃうわよ。もう一つもらうわね。

蘭子 いただきます。…美味しいわ。舌がとろけそう。  
(チョコレートケーキをじっと見つめる)何だがキラキラ光ってるわ。とても綺麗。水晶みたい。

真理子 そうね。少し光沢があるわね。

鶴田 チョコレートの結晶が光っているんですよ。テンパリングって言って、チョコレートを冷却する際に

ツヤができるんです。表面が光って見えるだけでなく、口溶けがなめらかになります。堺刑務所では、このテンパリングの技術が上手くできないと、パティシエとして認めてくれません。

真理子

厳しいのね。(ケーキを頬張りながら言う)

蘭子

…チョコクリスタル…：ていうのはどうかな。(自信

なさげに言う)

真理男

チョコクリスタル？

蘭子

うん。商品名にしたらどうかかって思っで。クリス

タルみたいにキラキラしてるから。

真理子

いいわね。素敵な名前。蘭子さんはネーミングが上

手ね。

蘭子

そんな事…ないです。

丸男

よし、決まりだ。さっそくこのチョコ…：何と言ったつ

け。

蘭子

チョコクリスタルです。

丸男 チョココクリスタルを、店で売りだそう。きっと店の

看板商品になるぞ。鶴田君できるかね。

鶴田 まかせてくんさい。ただし条件がありやす。

丸男 条件とは。

鶴田 まず、材料は全てワイが発注をかけて店に届けさせます。それと、ワイがチョコクリスタルをこさえてる間は、決して厨房の中を覗かないでもらいてえです。

丸男 まるで鶴の恩返しだな。まあ別にかまわんよ。

鶴田 ありがとうございやす。

丸男 頼んだよ鶴田君。さあ、これからこのチョコクリス

タルをばんばん売って、ばんばん儲けるぞ。

真理子 父さんが早いわよ。

真理男 父さんのいつもの悪い癖だ。とにかく、今はまだ棚

入れの途中だ。早く済ませてしまおう。(一つの箱

をじっと見て)これ、蘭子さんが棚入れしたの。

蘭子 はい、そこから先は、私がやりましたが…

真理男 日付けが間違っている。

蘭子 え、そんな…

真理子 本当だわ。

蘭子 やだ、私またやってしまったわ。すみません。直ぐにやり直します。

真理男 いいよ。蘭子さん。気にしなくても。

真理子 そうよ。みんなで手分けして並べ直そう。一時間もあればできるわ。

蘭子 ごめんなさい。私のせいで…(ペコペコと頭をさる)

丸男 たいした事じゃないよ。誰にだって失敗はあるさ。

俺なんて若い頃には、友人の結婚式のスピーチで。

お父さんその話は何度も聞いたわよ。前の奥さんの名前を言っちゃったんでしょ。

丸男 会場中が凍りついたよ。

真理男 父さんの失敗は、若い頃だけに限った事じゃないよ。

丸男 そうだ、そうだ。今だって失敗つづきだ。でも、今日

日の警察に電話をかけているフリをして、ヤクザを追

い払ったのは上手くいっただろう。

真理男 住之江会の二人、まんまとだまされてたね。さすが

タヌキの梶本の異名を持つ父さん。

丸男 息子に褒められると照れるな。

真理子 ちよつとあんた達、無駄口たたいてないで手を動か

しなさいよ。

丸男 はいはい。わかったよ。

真理男 この箱はこつちだっけ…

真理子 一番左端よ…ほらお父さんコード踏まないで…

丸男 あ、すまん。すまん。

舞台がだんだんと暗くなる

暗転

蘭子

(声のみ)その後、チョコクリスタルと名付けたケーキは、またたく間に評判となり連日売り切れが続きました。噂を聞きつけたグルメ雑誌でも取り上げられ、傾きかけていた店の経営は、一気に急上昇しました。

明かりがつく。「明美メンハラクリニック」の看板  
診察室で女医の明美と蘭子が向かい合って座っている。

明美

そう、良かったじゃない。店が繁盛して。

蘭子

でも明美先生。私心配なんです。

明美

あら、どうして。

蘭子

だって、私またクビになるんじゃないかって…

明美

取り越し苦労よ。店の経営が上手くいってるのに、

蘭子さんをクビになんかするはずないじゃない。

蘭子

だって私だったらいつも失敗ばかりして、みんなの足手まといだし、鶴田さんっていうチンプラみたいな新人が入ってきてから、私は用無しみたいになっちゃって。

明美

一緒に働いてる人達は、蘭子ちゃんになんて言ってるの。何か厳しい事でも言われたの。

蘭子

いえ。

明美

だったらいいじゃない。

蘭子

何も言わないから余計に辛いんです。私がドジを踏むと、何だかみんな私に気を使って白々しく自分達の失敗エピソードを語ったりするんです。

明美

それはね。蘭子ちゃん。みんながあなたの事を好きだからよ。あなたの事を必要に思ってるから、落ちこませないためにやってるの。

蘭子

誰も私の事なんか必要にしてません。

明美

泣かないで蘭子ちゃん。お店の人はみんな優しい

んでしよう。それでいいじゃない。それに、いつかきつと素敵な男性が「君の事が必要なんだ」って告白してくれる日が来るわ。東京ラブストーリーみたいな。

蘭子 東京ラブストーリーって何ですか。

明美 今再放送を観てたのよ。：そうか、若い子は知らないのか。私も歳をとったもんだ。嫌だわ。昔流だったのよ。「かーんち。セックスしよう」っていったね。

蘭子 そうなんですか。ごめんなさい。私知らなくて。

明美 いいのよ。別に、謝る事じゃないわ。：ほら、元氣だすのよ。私はいつもあなたの味方よ。

蘭子 本当ですか。：じゃあお友達になつてくれますか。

明美 私、明美先生としか心の内を話せなくて。もちろんいいわよ。

蘭子 嬉しい。

明美

私も蘭子ちゃんとお友達になれて嬉しいわ。

蘭子

じゃあ明美先生。お近づきのしるしに、今夜一緒に出かけませんか。

明美

え…今夜。もちろんいいわよ。何処か行きたいところでもあるの。

蘭子

ええ、神戸のルミナリエに行きたいんです。私、子供の頃からキラキラ輝くものを見るのが好きなんです。夜景とかイルミネーションとか。

明美

たしかチヨコクリスタルって商品名も蘭子ちゃんがつけたのよね。クリスタルもキラキラしてるわ。えーと今日の夜ね。(手帳をめくる)。いいわよ一緒に行きましよう。

蘭子

明美先生本当にいいんですか。めんどくさいとか思ってますか。

明美

思うわけないじゃないの。私も蘭子ちゃんとルミナリエに行くのが楽しみだわ。蘭子ちゃんいい。(手

を握る)心が苦しい時は、相手が自分に大して否定的な考えしか持っていないと思いがちなもの。もっと心を楽にして。私は蘭子ちゃんのためだったら何でもするから。

蘭子  
明美 明美先生。私…先生がいないと生きていけません。涙がでるのも、心が苦しい証拠よ。さあこれで涙を拭いて。(ハンカチを手渡す)

スマホの着信音

明美 ちよっと待っててね。(廊下に出る)

みずほじゃないの。久しぶり。どうしたの。…え、今晚クラブヌーボーに。私はよすわ。患者さんと約束したのよ。一緒にルミナリエに行こうって。…え!シンジが空いたの。嘘、行きたい。行きたい。明日は空いてないの。ヒロトなら空いてるって。駄

目よヒロトじゃ。シンジの方がイケメンなんだから。今日行くから。私の名前で予約とつといて。え…ルミナリエ。行かないわよ、めんどくさい。じゃあよろしくね。

診察室に戻る

明美

あの…蘭子ちゃん。本当に申し訳ないんだけど、これから急患が運び込まれる事になっちゃって。今日は…その行けないわ。

蘭子

そうですか。精神科にも急患が運び込まれる事があるんですね。

明美

え…ええ…。ごく稀にあるのよ。ごめんなさい。この埋め合わせはきつとするから。

蘭子

いいんです。先生。気にしないで下さい。元々一人で行くこうって思っていましたから。

暗転

いしづきマート吉野営業本部。暗闇、御簾の奥の人影と平伏する男ヒロト。

人影 笠置町店が独自で売り出した新商品「チヨコクリス

タル」は驚異的な売り上げを記録しているな。

ヒロト は、我が君。今まで閉店候補リストの筆頭であった

のが、今や梅田店やなんば店に匹敵するほどの業績です。

人影 いち早く我が吉野営業本部に取り込んで、直営店に

しなければならぬ。余も密偵を数名送り込んで画策しておるが、経過は思わしくない。店長の梶本丸男という鼠輩は、店を譲る気は毛頭ない。が、しかしぐずぐずしていると、京都営業本部のヤカラ共に

奪い取られかねかい。彼奴らは金に糸目をつけないからの。そうは思わぬかヒロト。

ヒロト は、ですが我が君。笠置町店は京都府内にございませれば……。

人影

それがどうした。吉野エリアはもう枯渇状態である。多少強引でも隣のエリアから加盟店を奪い取らなければ、我が吉野営業本部は自滅するしかあるまい。

ヒロト

さすがは我が君。

人影

特別に余の名前で呼ぶ事を許可する。

ヒロト

恐れ多い事にございますが、我が君のお許しとあらば……全知全能の神。輝ける太陽神にして我らが救世主。チャールズ後醍醐ピーター営業本部長殿。

チャールズ 余の誇り高き名前。この名を知る者は、余とわぬしだけである。

ヒロト あー、ありがたき幸せ。

チャールズ 時にヒロトよ。ホスト業には慣れたか。

ヒロト 仰せの通り、業務終了後に毎晩東心斎橋のクラブ

ヌーボーでアルバイトをしておりますが、なかなかもって敵しい世界であります。

チャールズ ナンバーにはなれんのか。

ヒロト シンジという不動のナンバーがおりますので…

チャールズ 泣き言は聞きたくない。

ヒロト 私めとしたことが、つい愚痴をこぼしてしまいました。お恥ずかしい限りで。

チャールズ まあ良い。ところでヒロトよ。明日笠置町の

例の店に行って、チョコクリスタルを5ケばかり

購入してきてたもれ。

ヒロト 5個…5個ですか。全能全能の神、輝ける太陽神に

して我らが救世主。チャールズ後醍醐。ピーター閣下。

大変申し上げにくいのですが、チョコクリスタルは

好評のためお一人様ふたつまでしか購入できません。

チャールズ はー(溜息)ヒロトよ。それでもわぬしは、クラ

ブナーボーのナンバー2かね。見損なつたぞ。

ヒロト 面目ありません。しかし店の決まりでして。

チャールズ 頭を使いなされ。わぬしのお得意のツンデレ作戦があるであろう。一見クールに見せかけて、女性の前では子供のように甘えてみせる。これで母性本能をくすぐりまくり、ロレックス、アルファロメオを手に入れてきた。「いただきヒロト」の本領を發揮したまえ。

ヒロト ははー(平伏する)ありがたきお言葉。

チャールズ ヒロトよ。わぬしの噂は余の耳にも届いておるぞよ。ナンバー1のシンジに差をあげられたばかりか、新規参入店のクラブスキャンダーのジョーに、常連客を吸い取られていってらしいではないか。

ヒロト 直ぐに取り返して見せます。東心斎橋でナンバー1ホストはこの私だって事を、シンジとジョーに思い知らせてやりますよ。

チャールズ そうだ、その意気だ。東心斎橋ナンバー2の  
プライドにかけて、明日は必ずやチョコクリスタル  
を5個手に入れてくるのだ。

ヒロト 必ずやこの手に。

暗転

いしづきマート笠置町店

真理子 (にこにこしながら) ただいま。今帰ったわ。

真理男 姉さんお帰り。何だか楽しそうだね。

真理子 あら、わかる。

丸男 顔が華やいで見えるよ。ロンドンの大学から入学

オファアの手紙が届いたのかい。

真理子 ロンドン物流アカデミーからの入学許可が届くのは、

早くても後一カ月は先よ。今ごろはきつと私の論文

を精査して入学許可の判定をしているところじゃないかしら。

真理男  
じゃあ、どうしてそんなウキウキしてるの。…ひよつとして。

真理子  
そう、そのひよつとしてよ。ジョーさんから明日デートに行かないかって誘われたのよ。(照れながらハンドバッグを振りまわす。真理男の顔面に当たる) いやん、恥ずかしい。

真理男  
姉さん。まだあんなチャラ男と付き合っているの。

真理子  
ジョーさんはチャラ男なんかじゃないわ。とっても真面目な人よ。

丸男  
何でも東心斎橋でナンバーのホストだそうじゃないか。我が娘にこういう言い方をするのも何だが、どうしてお前なんかと付き合ってくれるんだ。ロマンス詐欺じゃないのか。父さんは心配だ。

真理男  
父さん。ナンバーはクラブヌーボアのシンジだよ。

丸男 そうなのか。

真理男 それにジヨウがいるクラブスキャンダーなんて、まだまだ東心斎橋じゃ新参の店だし、品格から言ってもヌーボーの足下にも及ばないよ。

丸男 なんでお前は、そんなにホスト界の事情に詳しいんだ。

真理男 これだよ。(手に週刊誌を持っている)これに詳しく書いてある。

丸男 週刊ホスト…か。

真理男 こいつを読めば、全国のホスト事情が一目瞭然さ。毎週定期購読してるんだ。創刊号は、カリスマホストのローラントのプロマイドが付いてたんだぜ。

丸男 なるほどな。…で、なんでお前はそんな雑誌を定期購読しているんだ。

真理男 いいだろ。ほっといてくれよ。

真理子 二人とも何の話してるのよ。ともかくジヨウさんは、

チャラ男じゃないし、ロマンス詐欺師でもないわ。

私の事を大切に思ってくれてる人よ。

真理子

姉さんいいかげんに目を覚ましなよ。

丸男

真理子の言う通りだ。お前は今大事な時なんだ。イギリスに留学できるかどうかの瀬戸際なんだよ。

真理子

もう論文も提出してるし、今さらじたばたしてもしかたないわよ。それに、私だってドラマみたいな

恋愛をしてみたいわ。これまで勉強ばかりの人生だったんだから。(遠くを見つめてうっとりとする)

だめだ、二十五年間なまじ勉強しかしてこなかった

真理子

から、恋の病にかかるとたちが悪い。

丸男

深入りしすぎて、後で辛い思いをしなればい

真理子

んだが。(鼻唄を歌いながら店の奥の自宅に入る)

蘭子

お姉さん嬉しそうですね。

丸男

おお、蘭子君。君いたのか。

蘭子 はい。トイレの掃除をしていました。

丸男 それはご苦労だったな。いつからやってたんだ。

蘭子 2時間前からです。

丸男 そうか。蘭子君はいつも仕事が大変で助かるよ。

蘭子 ありがとうございます。もっと頑張ります。

丸男 いや、ほどほどでいいよ。ほら、お客様が来たよ。

レジに立って。

蘭子 いらっしやいませ。(緊張してたどたどしい)

ヒロト (まるでモデルのようなキザな歩き方で店内に入っ

てくる)

蘭子 すごいクールな人だわ。

真理男 何処かで見ることがあるような…。

ヒロト (カウンターに壁ドン)

蘭子 壁ドンだわ。

ヒロト 失礼、お嬢さん。チョコクリスタルを5ヶ買っちゃ

おうかな。

蘭子 5つですか。えーと、えーと。どうしよう。(オロオロする)

真理男 (横から助太刀する)お客様、あいにくですが、チヨ

コクリスタルは、お一人様お二つまでとさせていただきます。

ヒロト なんだって、二つしか買えないのかい。

真理男 はい。お客様。

ヒロト なるほど、よくわかったよ。(チャールズ後醍醐  
ピーターの声が聞こえてくる)

チャールズ わぬしの得意技のツンデレ作戦があるであろう。一見クールに見せかけて、女性の前で甘えてみせる。これで母性本能をくすぐり、ロレックスやアルファロメオを手に入ってきた「いただきヒロト」の本領を發揮したまえ。

ヒロト やだ。やだやだやーだ。僕ちゃんやだもんね。絶

対5個買うんだもんね。(手足をばたつかせて地団

駄を踏む)

真理男 どうしたんだろう。急に幼稚園児みたいに駄々をこねたぞ。お客様、当店の決まりですんでご理解願います。

ヒロト (地面に仰向けになって手足を振り回す) やーだやーだ。買うんだったら買うんだもん。僕ちゃん。チヨコクリスタルが欲しいんだもん。

真理男 お客様。駄々をこねられても困ります。さ、そんな所で寝ないで、お立ち下さい。

ヒロト やーだやーだ。売って。売って。僕ちゃん売ってくれなきゃここを動かないもんね。

真理子 (騒ぎを聞きつけて、部屋から出てくる) なんだか母性本能をくすぐられるわ。可哀想だから、5つ売ってあげましょうよ。

真理男 姉ちゃん甘いよ。ちょっとイケメンだからって。こんな男のわがままを許していたら、直ぐに売り

切れちゃうよ。

真理子 大丈夫よ。(奥に向かつて)鶴田さん。後いくつ作れますか。

鶴田 (奥の厨房から声がする)あと五つは作れます。

真理子 ちようどいいわ。その五つを、この駄々っ子に売ってあげましょう。(ヒロトに向かつて)さあ、もうすぐできあがるからね辛抱するのよ。

ヒロト うん。僕ちゃん嬉しい。

鶴田 できやした。(厨房の隙間から腕を出して、チヨコクリスタルの五つ入った箱を差し出す)

蘭子 (受け取る)お待たせしました。二千四百円です。

ヒロト (突然何事もなかったかのように立ち上がり、キザな手振りで背広からクレジットカードを取り出す)

真理男 アメックスのブラックカードだ。初めて見た。

蘭子 ありがとうございます。

ヒロト ありがとうございます。(モデルウォーキングで退場)

真理子 不思議な人ね。

真理男 いったいなんだったんだ。

丸男 おい、今の男。こいつじゃないのか。(週刊ホストをみせる)

真理子 クラブヌーボアのニューフェイスヒロトですって。

一見クールにみえて、時に純朴な少年のように甘えてみせる二面性で女性客を魅了するのが特徴。

新人ながら東心斎橋では同じくヌーボアに所属するシンジに次ぐナンバー2ホスト。別名いただきヒロトだつて。

真理男 あいつホストだつのか。どこかで見た気がすると思つたら週刊ホストにでていたんだ。…ということは、僕たちはまんまとあいつの手にしてやられたわけだ。さっきのはいただきヒロトの常套手段だつたんだ。

丸男 母性本能をくすぐり、欲しい物を手に入れる。見

事なテクニクだったな。

真理子 私も危ないところだったわ。

真理男 姉さんは、完全に奴の手に引っかけたじゃないか。

い。

真理子 うるさいわね。あの男が不憫だからちよつと情け

をかけてやっただけよ。それより真理男。あんた

また新しい時計買ったの。

真理男 へへ。気がついた。ザウオッチの限定モデル。

エクセレンスラブメタリックバージョンさ。世界

に二つしかないレアアイテムで、手に入れるのに

苦労したんだぜ。(自慢げに腕時計を見せつける)

ほら、ここを押すと液晶が光るんだぜ。

真理子 そんなの普通の腕時計じゃないの。まったくどこ

がいいんだか。私のこととやかく言うよりも、そ

んなおもちゃみたいな腕時計にバイト代つき込む

の、いいかげんにやめたら。

真理男 ほっといてくれよ。

真理子 私、明日のデートの準備があるから部屋に戻るわ。

後、よろしくね。(奥にひっ込む)

丸男 (スマホの着信音おっと電話だ。いしづきマート

吉野営業本部からだ。はい、梶本です。(奥へ行く)

蘭子 お姉さん、明日のデートが楽しみなんでしょうね。

上手くいくといいわ。

真理男 上手くいったまるか。

蘭子 どうしてそんな事言うの？

真理男 君。さっきの話聞いてなかったの。

蘭子 ごめんなさい。いったい何の話。

真理男 姉さんは今とっても大切なときなんだ。

蘭子 大切な時。

真理男 そう。姉さんは物流科学の研究で博士号を持って

るんだ。今はロンドンのロイヤル物流アカデミー

から留学許可の知らせを待っているところさ。

蘭子

とつても優秀なんですね。でも、それとデートに誘われたことは関係ないんじゃないですか。

真理男

それが大ありさ。姉さんは物流科学の研究に人生の全てを賭けてきたんだ。今度のロンドンへの留学は姉さんの夢への第一歩。それがもし悪い男にでも引つかかってみろ。姉さんのことだからもう留学は取りやめると言いかねない。

蘭子

姉さんのことだからって？

真理男

姉さんは…その、男をみる目がなくてね。以前にも一度あったんだけど男を好きになると、その人の事しか考えられなくなつて、勉強どころじゃなくなるんだ。だからせめて、ロンドンへの留学が正式に決まるまでほ、男と付き合うのは待つてほしいんだ。

蘭子

いろいろと大変なのね。ところで、ロンドンの物流科学アカデミーってところ、そんなにすごいの。

真理男

そりやすごいよ。なんてったってロンドンといえ  
ばロジステイクス分野の研究では世界トップクラ  
スだからね。その中でも姉さんが留学するかもし  
れないロイヤル物流科学アカデミーのバリスタ教授  
は、物流研究の大家で、彼の率いる研究チームは、  
チームバリスタと呼ばれてるんだ。

蘭子

何だが私にはむずかしくてよくわからないわ。

真理男

へへ、実は僕もよくわからないだ。とにかく、姉  
さんはとても頭がいいんだ。

蘭子

努力なさったのね。

真理男

姉さんだけじゃないぜ。親父は会計士だし、親父  
の弟のヒデ叔父さんは、大学病院の教授なんだ。そ  
れに死んだ母さんは、元アイビーエムの役員で、ハー  
バード大学の客員教授でもあったんだ。創業同時の  
アップルコンピュータの初期設立メンバーで、若  
き日のスティーブジョブズに次世代型携帯電話のア

アイデアを授けたんだ。それが現在のスマートフォン  
の原型になったってわけ。

蘭子

ちよっと待って。たしか亡くなったお母さんの名前つ

て…本田…

真理男

旧姓本田あい。

蘭子

本田あい…本田あい…ホンダアイ…フォンダアイ…

フォン…アイフォン…まさか。

真理男

そう。つまり「アイフォン」の商品名は、母の名前

が由来なんだ。

蘭子

始めて聞いたわ。そんな話。みんな頭の良い人ばか

りだけど、亡くなったお母さんが突出しすぎている

わ。

真理男

うちの家系はみんな秀才がそろっているけど、僕だ

けはボンクラなんだ。

蘭子

そんな事ないわよ。真理男さんも良く頑張ってるじゃ

ない。紫苑《しおん》先生も言ってたわ。真理男君

は真面目だって。

真理男

紫苑先生は、最近笠置電気専門学校に赴任してきたばかりの先生だけど、なぜか僕のことを凄く気にかけてくれるよ。物静かで優しい先生で頼りになるんだ。この間、姉さんに悪い男がついて困ってるって相談したら、こんな物をくれたよ。

(手の平の小さな電子部品を見せる)

蘭子

何、これ。

真理男

発信機さ。盗聴機能もついている。こいつを明日、二人の後をつけて行ってどうにかしてジョーの身辺に取り付ける。

蘭子

どうしてそんな事するの。

真理男

ジョーって奴が、いかに悪い男かを姉さんに教えるためさ。あの手の男は絶対浮気をしている。いや、ひよっとすると、姉さんの方が浮気相手で、本命の彼女は他にいるのかもしれない。いずれにせよ発信

機でその事実を突き詰めれば、姉さんの恋の熱も冷めるだろうと思つて。

蘭子

お姉さんの事、そつとしておいてあげたら。

真理男

僕だつてできれば二人の事に関わりたくはないよ。

でも姉さんには人生をかけた研究があるんだ。あんなくだらない男にもて遊ばれて、今までの苦勞を台無しにされたくないんだ。

蘭子

そう……。真理男さん。ひよつとして姉さんの事が好きで、ヤキモチを焼いているんじゃないよ。

真理男

そんなんじゃないよ。

蘭子

ごめんなさい。真理男さん怒らないで。

真理男

別に怒つてなんかかないよ。しょせん君は他人だから、

姉さんがどうなろうと、構わないんだ。君に話した僕が間違つてたよ。

蘭子

私もお姉さんの事を心配してるわ。明日真理男さんが、お姉さんのデートの後をつけるって言うなら、

私もついて行くわ。

真理男

無理しなくていいよ。

蘭子

無理なんかしてないわ。

真理男

本当について来てくれるの。

蘭子

ええ、協力するわ。

真理男

さっきは強くあたってごめん。

蘭子

いいのよ。気にしてません。

真理男

明日、尾行中にどうにかしてジョーに発信機を取り

付けたいんだ。ジョーがトイレに行った時がチャン

スだ。僕はジョーの隣で用を足すフリをして、奴の

ジャケットのポケットに発信機を滑り込ませるよ。

蘭子

そんなに上手くいくかしら。もしジョーって人が一

度もトイレに行かなくなったらどうするの。それに

ジャケットを着てくるとも限らないわ。

真理男

そうだな。その時は、二人が歩いている時にジョー

の横を素通りして、そっとジョーのバッグに発信機

を取り付けるよ。

蘭子  
難易度が高すぎるわ。ジヨ一さんが気づかなかったとしても、お姉さんは絶対感づくわ。

真理男  
何か他に手はないかな。

蘭子  
私にいい考えがあるわ。

真理男  
どんな考えだい。

蘭子  
それよ。(真理男の腕時計を指差す)

真理男  
このザウオッチのエクセレンスラブメタリックバー  
ジヨン。世界に二つしかない限定モデルをどうしよ  
うっていうのさ。

蘭子  
明日になればわかるわ。

丸男  
(部屋から出てくる)いやー、まいったよ。

真理男  
電話長かったね。いしづきマートの本部は、なん  
て言ってきたの。最近よくかかってくるけど。

丸男  
この店を直営店にしたいって、しつこいんだ。

真理男  
勝手すぎるよ。今まで見向きもしなかったのに。

丸男

そうさ。あいつら鶴田君の作るチヨコクリスタルが売れだしたとたん態度を変えやがった。特に、今度新しく吉野営業所の本部長になった…なんて言ったかな、チャールズ後醍醐ピーターって野郎が、不気味なんだ。

真理男

名前からしてふざけてるよ。そんな奴は放っておけばいいじゃん。

丸男

ああ、ワシもそのつもりだ。

蘭子

あの…もしこの店が本部直営店になったら、どうなるんですか。

丸男

まず、ワシらは他の店に追い出されるな。

真理男

そんなの酷いよ。自分達は何の努力もせず、上手くいった店だけうわばみをかすめ取るなんてずるいよ。

丸男

まるでハゲタカのようにだけど、フランチャイズ店オーナーの宿命。ワシも何とか本部の思惑通りに

ならないように頑張ってみるよ。

客 (レジの前に並ぶ)あの…まだですか。

丸男 あ、失礼。お待たせしました。はい、チヨコクリス

タルお一つですね。毎度ありがとうございます。

真理男 いらっしやいます。(別の客に対応する)

蘭子 (要領悪く、店の雑用をこなす)

暗転

J R環状線桜の宮駅改札前

真理子 (腕時計をみながら、ジヨーが来るのを待っている)

ジヨー やあ、お待たせ。随分待ったんじゃない。

真理子 いいえ、全然。私も今着いたところよ。

真理男 (サングラスで変装してベンチの陰に隠れている)

嘘つけ。3時間も待ってたくせに。

蘭子 しー静かに。きこえるわよ。ジョーさんって人、凄

真理男 くイケメンね。(スカーフを真知子巻きにして変装)  
どこがだよ。あんな奴。ちっともイケメンじゃない

よ。まるでホスト崩れじゃないか。

蘭子 ホスト崩れじゃなくて、ホストよ。明美先生が好き  
そうタイプだわ。

真理男 明美先生って？

蘭子 私のかかりつけのお医者さんんだけど凄い面食  
でね。今はシンジっていう馬鹿なイケメンホストに  
夢中なの。

真理男 そうなんだ。おかしな先生だね。ところで蘭子さ  
ん、かかりつけのお医者さんって、どこか身体が悪  
いの。

蘭子 あ、いえ、その鼻炎なの。明美先生は耳鼻科の先生  
なの。…あ、見て。二人が歩き出したわ。追いか  
けなきゃ。(真理男と蘭子。尾行する)

真理男 あ、手をつなぎやがった。ゆるさねえ。(走り出そ  
うとする)

蘭子 (真理男の腕を掴んでくい止める)ちよつと真理男さ

ん。気づかれるわよ。お姉さん達、レストランに入るわ。少し離れた席から様子を見ましょう。

レストラン内

ジヨー 今日は、僕と食事をしてくれてありがとう。

真理子 そんな、私の方こそお誘いくださり、ありがとうござ  
います。(いつもと違ってか細い声)

ジヨー そのドレス、よく似合ってるよ。

真理子 ありがとうございます。(キャバ嬢みたいなスパン  
コールのドレスを着ている)

真理男 (小声で)どこが似合ってたよ。あれじゃまるで場  
末のキャバ嬢じゃねえか。

蘭子 (小声)ちよっと真理男さん。声が大きいわよ。

真理子 ジョーさんこそ。素敵なスーツですわ。

ジョー ありがとう。バーバリーのオートクチュールなんだ。

真理男 (小声)何か嫌な感じだな。

真理子 あの…実は、ジョーさんにプレゼントがあるの。気

にいつてもらえるかどうか。心配なんだけど。(小

さな箱をジョーに渡す)

ジョー え、何だろう。開けてもいい。(箱を開ける)あ、腕

時計だ。

真理男 (小声)あ…僕のザウオッチが…

ジョー これは、ザウオッチの限定モデル。エクセレンスラ

ブメタリックバージョンだ。

真理子 ご存じ何ですか。

ジョー ええ、そりやもう。僕はザウオッチマニアだからね。

ほら、ここを押すと光るんだ。

真理子 そうなんですか。…実は、弟の真理男が、ぜひジョー

さんに使ってほしいって言って、渡してきたのよ。

ジヨ一 真理男君が、どうして。

真理子 あの子、ジヨ一さんの事を気に入ったみたい。お兄

さんのように慕っているのよ。将来本当のお義兄さんになるかもしれないし。なんて事いうのよ。やだもう、私ったら恥づかしいわ。

ジヨ一 そ…そうなんだ。以外だな。一度挨拶したただけな

のに。その時も、僕の事を鬼でも見るような凄い形相で睨んできたから、てっきり僕を恨んでいるとばかり思っていたよ。

真理男 (小声) その通りさ。心の底から恨んでいるよ。

ジヨ一 でも、これはいただけだよ。真理男君に返しておいて。

真理子 あら、どうして。

ジヨ一 世界に二つしかない限定モデルなんだ。真理男君がその事を知っていて僕にくれたのかどうか分からない

いが、ともかくこんな貴重な物をもらう訳にはいかない。真理男君の気持ちだけで充分だと、伝えておいて。

真理男 (小声) あいつ結構いい奴だな。

蘭子 (小声) しっ、聞こえるわ。

真理子 いいのよ。真理男は同じ物を持っているって言うって。たし。二つ持っても仕方がないわよ。

ジョー 嘘だろ。世界に二つしかない限定モデルを、二つとも真理男君が手に入れたなんて。信じられない。

真理男 (小声) 嘘に決まってるだろ。いらないんなら返してくれよ。

真理子 世界に二つしかない物だから、ジョーさんと共有したいんじゃないかしら。あの子、実は凄く寂しがりやで、子供の頃はお兄ちゃんがほしいって良く泣いていたわ。

ジョー そんな風には見えないけどな。

蘭子 (小声) 本当なの。

真理男 (小声) ままあな。子供の頃の話さ。

ジョー そういうことなら、大切にに使わせていただくよ。真理男君にお礼をしたいな。今度ぜひクラブスキャンダに遊びにくるよう伝えてくれ。僕がサービスするよ。

真理子 あの子きつと喜ぶわ。

真理男 (小声) 喜ぶ訳ないだろ。誰が行くかよ。

蘭子 (小声) ホストクラブって男の人でも入れるの？

真理男 (小声) 知るかよ。

ジョー (スマホを取り出してじっと見る)

真理子 どうしたの。店からの呼び出し。

ジョー いや、何でもない。ただのいたずらメールだ。

真理子 これからどうするの。

ジョー 君を連れて行きたいところがあるんだ。

真理子 楽しみだわ。

二人、暫く楽しく談笑。その姿を別の席から監視する真理男と蘭子。

真理男 おかしいな。二人の会話が聞こえなくなったぞ。

蘭子 故障かしら。ちゃんとあの腕時計に紫苑先生からもらった盗聴発信機をしこんだのに。

真理男 故障なんてするはずないよ。天才科学者の紫苑先生が作ったんだから。

蘭子 じゃあ使用法を間違えたのかもしれないわ。…あ、二人が店を出るわ。

真理男 僕達も店を出よう。

ウエイトレス コーヒーとホットミルクお持ちしました。

真理男 遅いよ。もういいよ。

ジョーと真理子の後を追う真理男と蘭子

蘭子

何だかこの辺りってラブホテルが多い気がするんだけど。気のせいかしら。

真理男

本当だ。確か桜の宮っていう駅名だったよな。

蘭子

(スマホを見ながら) ネットには桜の名所って書いてあるけど。

真理男

二人がほとんど薄暗い方へ入っていくぞ。

蘭子

ねえ真理男さん。よしましよ。二人はもう大人よ。これ以上二人のプライバシーを探るのは失礼よ。

真理男

何言ってるんだこまで来て。もしあの男が姉さんを無理矢理ラブホテルなんかに関連込もうとしたら、

この僕が飛んでいって助けなきゃ。

蘭子

でも、お姉さん喜んでるわ。凄く楽しそうよ。

真理男

いや、あれは緊張を隠すためにあえて喜んでるふりをしてるんだ。いや、そうに違いない。絶対そうだ。

蘭子

そんな風には見えないけどなあ。あ、二人が雑居

ビルに入って行くわ。

真理男 許さねえ。姉ちゃんを助けなきゃ。おい、そのやさ男。(道に飛び出そうとするのを蘭子が引き止める)

蘭子 ちよっと待って真理男さん。あの二人が入ったのはラブホテルじゃないわ。何かのお店よ。

真理男 そうか、言われてみれば、ラブホテルにしては朽ち果てた佇まい。しばらく様子をみてみよう。

蘭子 集合ポストに店名が書いてあるわ。「ブティック小粋なガーリーエンゼル」ですって。ダサイ名前。

真理男 こんなボロ雑居ビルにブティックかよ。客くるのかな。

蘭子 窓から中の様子が見えるわ。(二人、そっと中を覗き見る)

メイドの格好をした店員が、ジョーと話をしている。

蘭子 お姉さんはどこかしら。

真理子 (試着室から出てくる。ゴスロリのメイドのドレスを着ている) 似合うかしら。(少し戸惑った表情をする)

店員 よくお似合いですわ。お嬢様。とつてもコケティッシュよ。(大袈裟に胸の前で手を合わせる)

真理男 痛い。痛すぎる。あの歳でゴスロリ系ファッションはないだろう。

ジヨ一 僕のイメージにぴったりだ。このまま着て帰るかい。  
真理子 …それは止すわ。

ジヨ一 そうかい。(店員に向かって)このドレスを包んで下さい。カードで。

店員 承知しました。御主人様。

真理男 あの男、趣味が悪すぎるだろ。

蘭子 でもお姉さん。良く似合ってたわよ。

店員 行つてらっしゃいませ。御主人様。お嬢様。(二人  
店を出る)

ジヨー 僕はこれから店に出るから、また今度デートしよう。

真理子 ありがとう。ジヨーさんってとっても優しいのね。

ジヨー 楽しみにしてるよ。でも、できれば僕は真理子さん

真理子 私、料理は得意なんです。亡くなった母のお手伝い

真理男 嘘だ。母さんは仕事と勉強の鬼で、家で料理なんか

蘭子 しー、声が大きいわ。

ジヨー じゃあまたね。さよなら。

真理子 さよなら。

二人、改札で別れる。真理子は、ジョーを見送った後、駅のホームに向かう。

蘭子 あ、発信機がまた動きだしたわ。

真理男 故障じゃなかったのか。

蘭子 音も聞こえるわ。ジョーさん。駅の中をうろろろしている。

真理男 どうしたんだろう。

ドアを開けて直ぐに閉じる音。その後、ブリブリ、プッスン  
プーおならの音が受信機から聴こえる。

真理男 トイレだ。ジョーは今トイレに入ってるんだ。

ジョー フンフンフーン…(鼻唄が受信機から聴こえる)



真理男 あ…あいつだ。いや違う。あれはジョーじゃない。

オッサンだ。

蘭子 でも発信機はあのオッサンを指している。

真理男 いったいどうなってんだ。

蘭子 気づかれたのよ。あの腕時計が発信機になってるっ

て事に。それでジョーさんはトイレですれ違ったオッ

サンの持っていた紙袋に発信機を滑りこませたんだ

わ。私達はジョーさんにたばかられたんだわ。

真理男 うー悔しい。何もかもお見通しだったってわけか。

でも、どうして気づいたんだろう。

蘭子 レストランでジョーさんがスマホの通知をみた時、

発信機が音信不通になったわ。ひよっとしてジョー

さんのスマホには、発信機や盗聴器を発見するアプ

リでも入ってるのかしら。

真理男 だとしたら、とんでもない警戒心だ。

暗転

いしづきマート吉野営業本部

チャールズ 時にヒロト。いしづきマート笠置町店で例の

物を買ってきてくれたかね。

ヒロト は、我が君、こちらにご用意しております。どうぞ

お納め下さいまし。

チャールズ 余は甘い物は好まん。わぬし、余に成り代わって食せよ。

ヒロト は、栄光至極にございます。それでは一つ食させていただきます。(一つたべる)こ…これは、うまい。

うますぎる。もう一つ食べよう。(むさぼり食う)

チャールズ はしたない奴だ。

ヒロト あと一つしか残ってない。私めとしたことが、我が

君の御前でなんて事を。

チャールズ まあ良い。実は今日わぬしを呼んだ訳は他でもない。わぬしと共にいしづきマート笠置町店乗っ取り計画に加担している構成員に引き合わすためだ。

ヒロト 何と、この秘密計画を私以外の者にも指令を出しておいででしたか。

チャールズ そうだ。わぬし一人では頼りないのでな。悪く思うな。

ヒロト 私一人では力不足だとおっしゃりたいわけですか。  
チャールズ ヒロト：わぬし、ほっぺたにチヨコレートがついてるぞ。

ヒロト は、失礼しました。

チャールズ わぬしをないがしろにするつもりはない。それだけこの計画が、我が吉野営業本部の将来を決する重要な案件であるかということだ。気を腐らせず、新たな構成員と協力してたもれ。

ヒロト かしこまってさうろう。

チャールズ クレイジージョー、入りたまえ。

ジョー (入室してくる)

ヒロト あ…お前は、クラブスキヤンダのジョーじゃないか。

ジョー そういう君は、クラブヌーボーのナンバー2。いた

だきヒロトこと、ヒロトだな。

ヒロト 我が君。なぜこのような青二才を同志に引き入れたのですか。

ジョー 黙れ老いばれホスト。

ヒロト なんだと若造。

チャールズ まあお互い静まりなされ。お前達二人には、半年前からいしづきマート笠置町店乗っ取り計画のため、東心斎橋でホストとして働いてもらっている。まあ、そうだよ。半年前のある日、突然ホストになるようにという辞令書が俺のデスクに置いてあった。  
(手に辞令書を持っている)

ヒロト 私もだ。(背広の内ポケットから辞令書を取り出す)

チャールズ 余が書いたものだ。二人とも良く頑張ってくれている。ヒロトには、例の母性本能くすぐり作戦で、入手困難なチヨコクリスタルを五つ購入してもらった。

ジヨー そんな事しなくても、並べは普通にかえたんじゃないのか。

チャールズ だまらっしゃい。最後まで聞くのだ話をば。これからチヨコクリスタルを科学班に持って行って美味しさの秘密とやらを分析してもらおうところだ。

ジヨー お、これだな巷で噂のチヨコクリスタルっていうケーキは。(口に放り込む)うまい。なんだこの美味しさは。

ヒロト あ、お前なんて事を。

チャールズ 最後の一つを食べてしもうたか。

ジヨー 何。これが最後の一つだったのか。悪い事をしたな。チャールズ まあ良いわ。クレイジージヨー、お前にもずい

ぶんと頑張ってもらったな。

ジョー 苦労したぜ。指令とはいえ、いしづきマート笠置町

店のオーナーの愛娘、真理子とかいうブス女とデートをするのは。

ヒロト 何、お前、あのリアルウマ娘とデートしたのか。ちょっと見直したぞ。

チャールズ その馬みたくない女から、店に関する情報を聞きだすことはできたのか。

ジョー ブスなくせに口が硬い。だがオーナーである父親の梶本丸男は、店を手放す気は無いという事は言っていた。

チャールズ うむ、やはりそうか。

ジョー ところで気をつけた方がいいぜ。真理子の弟の真理男は、俺の事を怪しいと感づいているようだ。

チャールズ どういうことだ。

ジョー 腕時計に発信機を仕込んだものを、俺にプレゼント

してきやがった。

ヒロト なんだって。

ジヨー

まあ、最も真理男は俺をいしづきマートの本部の間だとは思ってなく、たんに姉を誘惑して金を奪うロマンス詐欺師か何かだと勘違いしているらしい。

これを見るよ。(腕時計を見せる)この、世界に二つしかないザウオッチのエクセレンスラブレタリックバージョンの：偽物に発信機が仕込まれていた。

チャールズ 発信機はちゃんと取り外したんだろ？

ジヨー ああ、トイレですれ違ったオッサンの紙袋に入れてきたよ。

ヒロト 良く腕時計に発信機が仕込まれていた事に気付いたな。

ジヨー こいつのおかげさ。(スマートフォンを取り出し、

掲げる)発信機発見アプリだ。ドクターシヨーンXが開発したんだ。課金すれば、仕込まれた発信機の

盗聴機能をストップする事ができる。まさにシヨーンXは天才だよ。

ヒロト 誰だい。そのシヨーンXというやつは。

チャールズ もう一人の構成員だ。

ヒロト まだいたのですか。

チャールズ さよう。我がいしづきマート吉野営業本部が

誇る天才エンジニアだ。今は、余の指示に従って

笠置町立電子専門学校で教鞭をとっている。いでよ。

ドクターシヨーンX。

シヨーンX (眼鏡をかけたインテリ青年が入室)

ジョー 君のおかげで助かったよ。紫苑先生。

シヨーンX お役に立てて何よりだ。

チャールズ 同志シヨーンX。報告を聞こう。

シヨーンX 僕の教え子である梶本真理男と徳留蘭子の

線からいろいろと分かってくる分かってきたことがあります。

チャールズ 前置きはいい。早く情報を伝えてたもれ。

シヨーンX 結論から言って、いしづきマート笠置町店のオーナー梶本丸男氏は、本部に店を譲る気はまったく無い。

チャールズ うむ。クレイジージョーの報告と一致しておる。シヨーンX クレイジージョー氏の知らない情報を私は手にいれた。

チャールズ 話したまえ。

シヨーンX 梶本丸男氏は、広域指定暴力団、住之江会から脅迫されている。

チャールズ 理由はなんだね。

シヨーンX 梶本氏は、一年前まで住之江会の会計士をしていました。その当時の住之江会の金銭の流れを記録したデータを秘密裏に持ち出した疑いがあります。

チャールズ うむ。

シヨーンX 住之江会のチンピラ共が、躍起になってそのデータを取り返そうとしています。

チャールズ つまらぬことよ。せいぜい我々の壮大な計画の邪魔をせんでもらいたいものだな。我々に残された時は、後わずかしかない。三人力を合わせて、何とかしづきマート笠置町店を、吉野営業本部直営店にするよう。昼夜連続で任務にあたってもらいたい。フン。偉そうに。あんたはいったい何の権限があつて、俺達に指図するのさ。

ヒロト おい。クレイジージョー。チャールズ後醍醐ピーター様に失礼だぞ。

ジョー だいたいその訳の分からねえ名前からして、人を舐めきってやがる。いいかげんその面を見せやがれ。

(御簾を上げてようと走り寄る)

シヨーンX よせ、クレイジージョー氏。

ジョー (御簾に手が振れた瞬間、電気ショックが流れてその場に倒れる)

シヨーンX おい、クレイジージョー氏。しっかりしろ。

ジョー 何が起きたんだ。雷が落ちたのか。

シヨーンX 違う。君はチャールズ後醍醐ピーター閣下の

正体を暴こうとして、電気ショックを当てられたんだ。

チャールズ 下郎、余を怒らせるな。次は命がないものと思え。

シヨーンX チャールズ閣下。一つお伺いしてもよろしいでしょうか。

チャールズ 何かね。シヨーンX。

シヨーンX 閣下はなぜ、そこまで笠置町店の獲得にこだわるのでしょうか。

チャールズ 諸君らは知らなくても良い事ではあるが、まあいいだろう。教えて使わそう。これを見給え。(壁

が回転して大きな地図となる)この赤いしるしが、いしづきマート笠置町店である。そしてこの赤いしるしを軸にして、二本のラインが交差している。こ

のラインが何を表しているか分かるかね。

三人 (無言で顔を見合わせる)

チャールズ 誰もわかる者はおらんようだな。よろしい。良  
く聞きなされ。一本のラインは北陸新幹線である。

もう二本のラインは中央リニアモーターカーだ。つ  
まり、まだ極秘段階ではあるが、近い将来いしづき  
マート笠置町店のある場所には、北陸新幹線と中央  
リニアの巨大ターミナルが建設される。

ヒロト 初めて知った。

チャールズ 驚くのはまだ早い、これを見よ。(壁一面に三  
十階建てのビルのコンピュータグラフィックスと  
「日本初、総合型リゾートーR近日常オープン」の文  
字。

ジョー こ…これは。

チャールズ カジノだよ。この先四十年計画で、笠置町駅前  
はこれまでとは比べようのない発展をとげる。京都

営業所の彼奴らは、まだこの事を知らない。先に笠置町店の権利証を奪ってしまうのだ。将来莫大な利益を我々にもたらしてくれるだろう。

シヨーンX　なるほど、そういうわけでしたか。

チャールズ　何か不満かね。

シヨーンX　いえ、閣下の思し召しのままに。

チャールズ　シヨーンXよ。これ以上余計な詮索はせぬこと

だな。自分自信の身を守るためにも。

シヨーンX　は、軽率な質問でした。今後は自重します。

チャールズ　分かればよろしい。明日からわぬし達三人には、

いしづきマート笠置町店の向かいにある喫茶店で昼

夜連続で店の張り込みをしてもらう。

シヨーン　そこまでしなくたっていいだろう。京都営業所が巨

大ターミナルやカジノ構想に気づいてないんなら、

もっと気長にやればいいじゃないか。

チャールズ　あまい。あますぎる。よく聞け、わぬし達三人

がまだ知らない情報があと一つだけある。実は吉野営業本部を、来年三月末に閉鎖する旨を、東京本社が通知してきた。

ジョー　なんだって。

チャールズ　このまま何もせず座して滅びるくらいなら、多少強引でも勝負に出てドル箱優良店となった笠置町店を手に入れてしまえば、東京本社 of 横暴を差し止める交渉カードに使えるのだ。…まあ、クレイジージョーと、シヨーンXは、まだ若くて独身であるから吉野営業本部がほろびても、何とか再出発できるであろう。が、妻子を養っているヒロト他、多数の従業員の行く末を思えばこそその苦渋の決断であるのだ。分かったか。青二才。

ジョー　ちえ。わかったよ。

チャールズ　まだ何か言いたそうだな。青二才。

ジョー　ふざけやがって。いつかお前の正体を暴いてやるぞ。

暗転

メイドカフェ

真理子 ジョーさんに、また誘っていただいて嬉しいわ。

ジョー 僕も真理子さんとデートできて嬉しいよ。

真理子 でも私、何だか緊張するわ。こういう店初めてだから。

ジョー 落ち着いていればいいのさ。(足を組みながら)僕は常連だからね。

メイド お帰りなさいませ。御主人様。

ジョー いつものを。

メイド ツンデレソーダとキャンディローズパイのダブルですね。

ジョー たのむよ。

メイド お嬢様は何になさいますか。

真理子 私の事…えーと、これかな。(メニューを指す)

メイド 皆殺しのダンスパーティーですね。

真理子 …いや、その下です。

メイド ときめき餃子ニンニクマシマシですね。

真理子 あ、はい。それをお願いします。

メイド ジャマイカ風かギャラクシー風、どちらにします。

真理子 じゃあ、ギャラクシー風で。

メイド あいにくですがギャラクシー風は品切れでございます。

真理子 何で聞いたんだろ。じゃあ、もう一つの方をお願いします。

メイド ジャマイカ風かしこまりました。(厨房に向って、

大声で)お前さん。コーテルリャン、ソーハンイー。

厨房 (ねじり鉢巻のオヤジが、中華鍋を振りながら出て

くる)あいよー。

メイド (厨房に引っこ込む)

真理子 何だか変わったお店ね。

ジヨ一 元々は餃子の王将…大阪王将じゃなくて京都王将の方ね。…でバイトしていた二人が結構して夫婦でメ

イド喫茶を開いたんだ。

真理子 今の二人夫婦なのね。…でも、さっきのメイドさん。どこがで見たことある気がするんだけど。

ジヨ一 先週行った桜の宮のブティック「小粋なガリーエソゼル」のオーナーもやってるんだ。

真理子 オーナーであり、メイドでもあるなんて、まだ若いのに凄いバイタリティだね。

ジヨ一 京橋と十三に貸しビルを持っているって言ってたから、相当なやり手だよ。

真理子 すごいわ。私の父もコンビニ経営を初めて一生懸命頑張っているけど、なかなか売り上げが良くならなくて、身体が心配だわ。

ジョー 優しいんだね。真理子さんは。

真理子 そんな事ないわ。私も本当はお父さんの仕事を手伝ってあげなきゃいけないのに、ロンドン留学を優先しちゃって。

ジョー ロンドンへはいつ行くの。

真理子 まだ決まったわけじゃないわ。アカデミーからの返事を待っているところなの。

メイド ツンデレソーダおまち。(テーブルにでっかいジョッキを置く)

ジョー 君がいなくなると淋しいよ。

真理子 私：ジョーさんが残れって言うなら残ろうかな。

ジョー いけないよ。君の将来がかかっているんだから。ほら、バリスタ博士の：えーとなんていったっけ。

真理子 チームバリスタよ。世界中の物流科学のスペシャリスト達で結成された最強の研究チームよ。

ジョー そこに入れるんだろ。

真理子 まだ分からないわ。

ジョー 君なら大丈夫だよ。

真理子 ジョーさん。私：ジョーさんと会えなくなるなんて。

メイド キャンディローズパイおまち。

ジョー まだ先の事だし、今はそこまで考えなくていいんじゃないかな。それより店はどうなるの。真理子さんが

いなくなれば、お父さんと弟さんでやっていけるのかな。

真理子 苦労すると思うわ。お父さんは歳で身体が弱ってき

てるし、弟の真理男はたよりなくて経営には向いてないし。

ジョー バイトがいるんだろ。

真理子 二人いるわ。蘭子さんっていう真面目な子なだけで

ど、凄くドジで、正直いって店が忙しい時は、いな  
い方がましな子なの。それともう一人鶴田さんって  
いう男の方は、もっぱら厨房でチョコクリスタルっ

というケーキを作っているわ。凄く売れるからありがたいんだけど、チンピラまるだしの格好で、レジには立たせられないわ。

ジョー  
君がロンドンに行った後、そのメンバーで店をキリモリするには無理があるな。どうだろう、いっそのこと店をいしづきマート吉野営業本部に譲って直営店にしてしまえば。

真理子  
吉野営業本部の…なんて人だっけ。変な名前で、とても気味の悪い喋り方をする、チャールズ：

ジョー  
チャールズ後醍醐ピーター閣下

真理子  
そう、その人よ。その平安貴族みたいな名前の胡散臭い人から、日に十回くらい直営店にならないかって電話がかかってきて迷惑しているの。

ジョー  
そう…十回も。そんなに必死なんだ。

真理子  
ねえどうしてチャールズ本部長のことを知ってるの。

ジョー  
あ、いや、その…それは。

メイド トキメキ餃子ニンニクマシマシジャマイカ風、おま  
ち。

暗転

いしづきマート笠置町店

真理男 じゃあ学校行ってくるよ。

丸男 何だ、今日から冬休みじゃなかったか。

丸男 ちゃんと勉強をしないからだよ。まったく。蘭子君  
は行かなくていいのかい。同じクラスなんだろう。

蘭子 私は、ぎりぎり単位が足りてるので。

丸男 蘭子君を見習え。

真理男 行ってきます。

丸男

おい、聞いてるのか。本当にしようのない奴だな。眞理子はデートだし、今日は忙しくなるな。(奥の厨房に向って)鶴田さん。チヨコクリスタルは焼き上がった。

鶴田

ただ今出来上がりやしてございやす。(お盆にのせたチヨコクリスタルを棚にならべると、次々と売れていく)

丸男

鶴田さん。本当に助かるよ。(お客さんにむかって)お一人様2個までですよ。はい、おならび下さい。

蘭子

よし、頑張るぞ。私だってやれば出来るんだ。大丈夫。夫明美先生が言ってたわ。自分を信じるんだって。(レジに立つ)はい、いらっしやいませ。チヨコクリスタルお二つですね。ありがとうございます。(何人かのお客さんに対応する)

四時間経過

蘭子 いらっしやいませ。

客 23番のラークマイルドを下さい。

蘭子 はい、かしこまりました。

客 それじゃないよ。右だよ。右。

蘭子 はいすみません。

客 そっちは左だよ。俺から見て右だよ。お前は右と左の区別つかないの。馬鹿。

蘭子 すみません。あ、これですね。(足をつままずかせて、

タバコの棚をひっくり返す) す、すみません。しばらくお待ち下さい。

別の客 ちよっとソフトクリームまだ。

蘭子 はい、今直ぐ。

丸男 蘭子ちゃん。頼むよ。今手が離せないんだ。

蘭子 (ソフトクリームを手を持つ。慌てて客の頭にソフトクリームを落としてしまう。横でコーヒーマシー

客  
ンからコーヒーを取り出そうとしていた客が、弾みで自分の顔面にコーヒーをぶちまけてしまう）  
あちちち。おい、いいかげんにしてくれてよ。びしょびしょじゃないか。

蘭子  
すみません。（タオルで拭こうとする）

丸男  
お客様。大変申し訳ありません。蘭子君、ここはいから君はバックヤードの補充をしてくれないかね。でも…

丸男  
いや、いいから。

蘭子  
わかりました。（しょんぼりしながらバックヤードに向かう。）

丸男  
（しばらく一人でレジ対応をおこなう）

一時間経過

丸男  
（突然めまいがしてよろける）

鶴田 (異変に気づき走り出てくる) 丸男兄者人。どうしな

すったんですか。

丸男 いや、なんでもない。ちよっとたちくらみがした  
だけだ。

鶴田 少しお休みになられたほうがようござんす。(入口  
にクローズの看板掲げる)

丸男 鶴田君すまないね。

あつしはもうしばらくチョコクリスタルを作つてま  
すんで、丸男兄者人はここで休んでいて下さい。おー  
い、蘭子さん。お前さんも一休みしなせい。(バッ  
クヤードの蘭子に声をかけて、厨房に戻る)

蘭子 店長。大丈夫ですか。

丸男 少し休んだからね。だいふ楽になったよ。

蘭子 私のせいです。ごめんなさい。

丸男 君のせいなんかじゃないよ。ここ最近働き詰めだっ  
たからね。ちよっと疲れがたまってただけさ。

蘭子 あのだ：店長。私、今月いっぱい辞めさせていただきます。

丸男 なんてことを言うんだい。蘭子君。

蘭子 このまま続けていく自信がありません。：私、みんなに迷惑ばかりかけてしまって。

丸男 気にしすぎだよ。誰も君の事を迷惑だなんて思っていないよ。

蘭子 でも私、自分が嫌なんです。何をやっても失敗ばかりで、もう耐えられません。

丸男 (少し考えてから)今の仕事が辛くてたえられないんだったら、無理に引き止めはしないが、自分を責めちゃいけない。もう少し時間をかけて良く考えてみなさい。それでも気が変わらないんだったら、また私に話してくれ。：さ、そろそろ店を再開しよう。蘭子君はまだ休憩していなさい。気分が落ち着いてからでいいからね。

一時間経過

真理子 ただいま。まあ何これ酷いわね。店の中がぐちゃぐ

ちゃだわ。

丸男 やっぱりお前がいないと困るよ。店が回らなくて。

真理子 真理男はどうしたの。今日から冬休みでしょ。

丸男 アイツは成績が悪いから補習を受けに学校へ行つて  
るよ。

蘭子 (要領悪くレジの仕事をしている)

真理男 ちよっと蘭子さん変わるわ。のいてちようだい。

蘭子 すみません。

丸男 蘭子君、すまないがまたバックヤードを頼むよ。

蘭子 わかりました。(バックヤードに向かう)

丸男 おい、真理子(諭すように)

真理子 どうしたの。今忙しいのに。

丸男 あまり蘭子君にきつく当たらないでくれ。あの子

は繊細で傷つきやすいんだ。

真理子 きつくあたってなんかいいわよ。ちょっと跳ね飛ば

しただけよ。

丸男 それがいけないんだ。人によって感じ方が違うから  
な。

真理子 わかった気をつけるわ。

丸男 実はな、さっき蘭子君が店を辞めたいって言い出し  
たんだ。

真理子 なんですって。ちょっと蘭子さん。(バックヤード  
で作業中の蘭子に詰め寄ろうとする)

丸男 (真理子の手を引っ張り)お前のその威圧的な態度  
が蘭子君を萎縮させるんだ。ワシからもう少し説得  
してみるから、真理子は黙ってなさい。

真理子 わかったわ。でもどうして辞めたいなんて言い出し  
たの。私そんなに蘭子さんに厳しいかしら。

丸男

お前のせいじゃない。どうもあの子は自分が、みんなの足を引っ張ってるんじゃないかって気にしてるんだよ。

真理子

その通りじゃない。

丸男

ほらまたお前はそんな事を言う。もう少し優しい目であの子を見てやれよ。

真理子

わかったわ。(レジ作業に戻る。職人技のように素早い仕事ぶり)

真理男

ただいま。

真理子

お帰りなさい。補習はどうだった。

真理男

何とか落第せずすみそうだよ。(レジを手伝う)

真理子

しっかりしなさいよ。

真理男

勉強は苦手だよ。姉さんはジョーさんとのデートとてうだったの。

真理子

(急にデレっとなる)ジョーさんったら、とっても優しいのよ。私の事を凄く大事にしてくれるわ。ああ

いう人を紳士っていうのね。

真理男 そうは見えないけどな。なんかヒモっぽいし。

真理子 なんですって。あんたジョーさんの話になるといつも不機嫌になるわね。

真理男 そ…そうかな。そんな事ないよ。

真理子 そんな事ないわよね。ジョーさんに大切な腕時計をプレゼントしたくらいだし。

真理男 気に入ってくれたかな。

真理子 喜んでいたわ。私はよく知らないけど、あの時計凄く価値があるんですよ。

真理男 世界に二つしかないからね。

真理子 あんたも本当はジョーさんの事気に入ってるんですよ。昔から真理男はお兄ちゃんがほしいうって言ったも

んね。

真理男 子供の頃の話だよ。

真理子 もうすぐ本当にお義兄さんができるかもよ。

真理男

姉ちゃん気が早いよ。それに姉ちゃんにはロンドン留学っていう大切な目標があるじゃないか。そっちはどうするのさ。

真理子

そうね。すっかり忘れていたわ。

真理男

すっかり忘れてたって、姉ちゃんまじかよ。夢だったんだろ。一生に一度のチャンスをあんなゴスロリ趣味のチャラ男なんかのために棒に振るなんて、絶対ダメだよ。

真理子

変ね。どうしてあんたがジヨーさんのゴスロリ趣味を知ってるの。

真理男

いや…その、姉ちゃんが前に言ってなかったっけ。

真理子

そうだったかしら。まあいいわ。確かにジヨーさんのあの趣味だけはついていけないわ。

店の外、向かいの喫茶店から双眼鏡でいしづきマート笠置町店を監視するジヨー、ヒロト、シヨーン

ヒロト 何か変わった事はあるか。

シヨーン いつも通りさ。

ジヨー いったいいつまで俺たちはこんな事続けなきゃなんないんだ。

ヒロト しかたないだろう。チャールズ後醍醐ピーター閣下のご命令なんだから。

ジヨー あいつの言う事なら何でも聞かなきゃなんないのか。そんなに偉いのか吉野営業本部長ってのは。たかだか田舎の部長だろ。

シヨーン それでも私達の上司であることには違いない。不気味なところもあるが、私達の人事権を掌握している以上理不尽な要求にも従うしかあるまい。サラリーマンの宿命ってやつさ。

ヒロト 誰か来ました。

シヨーン やくざだ。

ジョー 一波乱起きそうだな。

シヨーン しばらく様子をみていよう。

いしづきマート笠置町店

高田 店長はおるかの。

真理子 あ、このあいだのチンピラだ。確か住之江会の。

高田 誰がチンピラや。おいボウズ。店長だしたらんかい。  
元会計士の。

真理子 父は今忙しいんです。∴ちよつと勝手に入ってこないで。

高田 じゃまするで。おい、梶本さんよ。あんたが事務所から持ち出した会計帳簿とつと返したってくれんか。

丸男 (奥の部屋から) そんなものは持ち出してない。

高田 おんどれまだしらをきるつもりかい。あれから事務

所の防犯カメラ確認したら、お前の姿がばっちり写ったぞ。

丸男 住之江会の防犯カメラはダミーで、実は録画など

していないはずだ。

高田 おんどれ何でそれを知っとんねん。

丸男 買いわ掛け帳に、偽防犯カメラ購入と記入したのを覚えてる。

高田 ふん。おもしろいやないかい。防犯カメラはおんどれの言う通りバッタもんやけど、コイツはホンマモンやど。(ピストルを向ける)

真理子 やめて。

ドン引田 サラマンダー会長が車椅子で入店

引田 まあ落ち着きたまえ。エクスカリバー高田。そんな物騒なもんはしもうてからに。

高田 は、ドン引田サラマンダー会長。(ピストルをしま

う)

引田 なあ梶本さんよ。あんた後々の自分の身を守るため

に、ワシから会計帳簿を盗んだかもしれないが、返してさえくれたら全て水に流そうやないか。盃も戻したるさかいあんたは今後一切住之江会と関わらんですむ。その帳簿が万一警察にでも渡ったら、お前さんも共犯の罪に問われるんやで。

丸男 ですから、そんな帳簿なんて私はしりませんよ。

ドン引田サラマンダー会長。

引田 そうか。知らんと、そう申すか。わかった。ようわかった。あまり手荒な真似はしたくはないが、こうとなつては致し方あるまいて。力づくでも家探しさせてもらおうかの。

鶴田 (厨房から出てくる)お待たせしました。新しいチョコクリスタルが焼き上がりました。…あっこれはド

引田 サラマンドー会長。

引田 誰かと思うたらヘタレの鶴田やないかい。住之江会を破門されてしばらく姿見いひんと思うとったら、こないなところでのいどったんか。梶本さんよ。あんた元ヤクザ集めて新しい組立ち上げるつもりだったか。

丸男 鶴田さんは、もうヤクザを辞めて立派に社会人として更生している。

高田 コイツはケーキを焼いとりますわ。

引田 ケーキを焼いとるんか。そりやおもしろい。

高田 こんなもんこうしてくれるわ。(ケーキのトレーを投げ飛ばす)

鶴田 もういや。(厨房に逃げ帰る)

高田 ひやひやひやひや。やっぱりヘタレの鶴田やの。変わつたらんわ。ほたらちよっくら事務所に立ち入らせてもらいまっせ。

丸男 おい、やめろ。真理男警察や。警察呼べ。

真理男 父さんのスマホでなきゃだめだ。このあいだみたいに。警察呼んだぶりするアプリ入れてないから。

丸男 アホ。今度は嘘じゃなくて本当の警察に電話かける。  
真理男 スマホを取り出す。

高田 おっとボウズ。勝手な事したら困るな。(真理男のスマホを取り上げて握り潰す。握り拳の中でスマホが粉々になり舞い散る)

真理男 よくもやったな。(高田に掴みかかる)

丸男 おい真理男よせ。手をだしたら相手の思う壺やぞ。  
真理男 でも父さん。こいつは僕のスマホを握り潰しやがった。

高田 ほらボウズどうした。殴ってみろよ。

真理男 脅しじゃないぞ。これでも喰らえ。(殴りかかる)

丸男 うー苦しい。胸が…(その場でうずくまる)

真理男 父さん。どうしたの。

丸男 胸が苦しいんだ。

真理子 (父にかけ寄る) 救急車を呼ばなきゃ。スマホで救急車を呼ぼうとする。

高田 またどうせいつものハッターリやろ。

真理子 (通話ボタンを押すのをためらう) 父さんどっちなの。

丸男 本当だ。本当に、苦しいんだ。早く救急車を。

高田 あんた腕上げたな。日本アカデミー賞なみの演技や。

真理子 父さんのスマホを貸して。このあいだ使ったアプリはどれ。

丸男 馬鹿。本当に苦しいんだ。お前は父親を疑ってるのか。

店の向かいの喫茶店

ジョー 店の中で騒ぎになってるぞ。

ヒロト 俺達も踏み込もう。

(三人で店内に突入する)

ジョー 警察だ。全員ここを動くな。

引田 警察だと、いつの間にか呼んだんだ。おい、エクスカ

リバー高田。いのけえ。(二人退場する)

丸男 く…くるしい。息ができない。

真理子 ジョーさん。どうしてここに。

ジョー 偶然店の前を通りかかったら、中から怒鳴り声が

聞こえたから、偶然ここを通りかかった友人のジョー  
ンXとヒロトの三人で警察官のふりをして中に入っ  
てみたんだ。

真理子 偶然が重なったわけね。

真理男 紫苑先生じゃないですか。

シヨーン やあ、梶本君に徳留さん。実はクレイジージョー

氏とは友達だね。彼は僕の事をシヨーンXと呼んで  
るんだ。君達も学校では僕の事をシヨーンXと呼ん  
でも構わないよ。

真理男 嫌だよ。そんな変な名前。でも、信じられないな。

こんな偶然ってあるのかな。

丸男 うー苦しい。

真理子 これは本当に苦しんでるわ。どうして演技じゃないっ

て早く言わないのよ。

丸男 言ってる…だろ…は、早く救急車を…

真理子 (スマホを手を持つ)

ヒロト (真理子のスマホを取り上げる)

真理子 何するのよ。あ、あなたはいただきヒロトね。

ヒロト 店の権利証を渡してもらおうか。

真理男 店の権利証だって。

真理子 ジョーさん、これどういう事。

ジョー 言う通りにするんだ。

丸男 うー苦しい。医者にもらった薬がそこにある。それ

を取ってくれ。

真理男 (取ろうとする)

ヒロト おっと一歩でも動いてみる。ただじゃすまないぞ

(ナイフをチラ付かせる)

シヨーン ヒロト氏、それはまずいよ。ちよっとやり過

ないか。

ジヨー ヒロトさん、やばいよ。出直す事にしよう。店

長本当に苦しんでいる。

ヒロト お前ら二人怖気づいたか。情けない奴らだ。(勝

手に事務所に入る)

真理男 お前達もしかして。

ヒロト やっと気づいたようだな。ボンクラ。

真理子 ジヨーさん…。

ジヨー 真理子さん。すまない。僕は吉野営業本部の人間だ。

ずっとこの店を乗っ取るチャンスがうかがっていたんだ。

真理子 酷いわ。ジヨーさん。

ジヨー すまない。悪く思わなでくれ。

真理男 この野郎。よくも俺の姉ちゃんを(殴りかかろうとする)

シヨーン やめるんだ真理男君(羽交い締めにする)

真理男 紫苑先生。あなたもこいつらとグルになって僕達を騙っていたんだね。

シヨーン 騙していたわけじゃない。大人にはいろいろと事情があるんだ。

真理男 最低だよ。何が大人の事情だよ。どうせ上司の後醍醐。ピーターとかいう奴に刃向かう勇気がないだけだろ。

ヒロト あったぞ、権利証だ。(苦しむ丸男の側に行き)さあ、店長さん。この解約手続の欄にサインをしてくださいませ。

丸男 うー苦しい。息ができない。

ヒロト (薬の小瓶をちらつかせる)意地はってないで早く楽になった方がいいんじゃないのかな。

ジョー ヒロトさん。苦しそうだ。薬を渡してやった方がいい。  
い。

シヨーン そうだよヒロト氏。こんなの間違ってる。

ヒロト おっと近づくんじゃない。(ナイフを皆に向ける)お前ら土壇場になっていい人ぶりやがって、悪人になりきれないなら最初からことわれよ。このまま引き下がったら一生チャールズ後醍醐ピーターとかいういかれた上司の下でコキ使われるだけだ。

丸男 く…薬をくれ。

ヒロト オッサン俺は本気だ。早くサインをしろ。(権利証を突き出す)

丸男 (震える手でサインする)

ヒロト やったぞ。自ずからサインをしたぞ。皆見てたよな。後の災いとならぬよう証人となってくれ。この人は自らの意思により解約手続にサインをしたのだ。決して脅されたからではない。

真理男 完全に脅しじゃないか。よくもいけしゃあしゃあと。

丸男 薬をくれ。

ヒロト ほらよ。

丸男 (一気に飲み干す)

救急車のサイレンの音がする。

ヒロト 誰が呼んだんだ。

蘭子 わ：私です(震えながら)

ヒロト 余計な事を。おい、ずらかるぞ。

三人店を出て行く。

真理子 ジョーさん。

ジョー 私、信じてたのに。

ジョー 真理子さん。すまない。

救急車のサイレンが近づいてくる。

暗転

2 クリスタル

病室

丸男 (ベッドに横たわる)

医者 軽い胃潰瘍じゃけん。一週間もしたら退院できるばい。

真理男 ありがとうございます。ヒデ叔父さん。

真理子 ヒデ叔父さんが大病院の教授で助かったわ。こんな立派な病室に入らせてもらって、ありがとうございます。

ヒデ  
何、心配いらんよ。元々おったクランケを早めに退院させてやったけん。いつもこのやり方で患者を入れ替えとるんよ。

鶴田、蘭子が入室してくる

真理子  
鶴田さん、蘭子さん。お店の方任せっきりでごめんなさいね。

鶴田  
いえ、いいんですよ。店の方は臨時休業にしています。丸男兄者人のご様子はいかがですか。

真理子  
医師からは、軽い胃潰瘍だっていわれたわ。

鶴田  
きつと日頃の疲れが出たんでしょう。ゆっくりと休養するべきですよ。せつかく寝ているところを起こしてしまつては悪いので、私はこれで失礼します。これ、店長さんに。二人からです。(果物がごを指しだす)

蘭子

真理子 ありがとう。…あの、蘭子さん。

蘭子 なんですか。

真理子 いつも厳しい事言ってごめんなさいね。

蘭子 いえ、いいんです。私の要領が悪いのがいけないんです。失礼します。

鶴田、蘭子、退出する、

丸男 ま…真理子。

真理子 お父さん。目が覚めたの。

丸男 真理男もそこにおるか。

真理男 ここにいるよ。父さん。

帰りかけた鶴田と蘭子が立ち止まる。

丸男 店…店は。

真理男

権利証を本部の奴らに持っていかれた。あいつら汚いやり方で、一方的に父さんに無理矢理サインをさせたんだ。こんなの無効だ。明日一番で本部に電話を入れてやる。

丸男

よせ、本部に逆らっちゃいかん。あれこれ理屈をけて、フランチャイズ契約を一方的に解除されたあげく、多額の賠償金を請求される事になる。ワシはそんなオーナーをこれまで何人か見てきた。

真理男

でも、こんなの納得できないよ。父さんが一生懸命頑張って、やっと持てた店だけ。

丸男

そうだったな。でももういいんだ。ワシももうそう永くはいきられない。どのみち店を閉じなきゃならん。

真理子

何言ってるのよお父さん。直ぐに良くなるわよ。ヒデ叔父さんも軽い胃潰瘍だって言ってるし。

ヒデ

そうだべ兄さん。元気だすべ。何も心配いらん。

丸男

ヒデは嘘をつくと、鼻の頭をかく癖があるんだ。ワシは眼鏡をかけてないからヒデの顔を見れんが。

ヒデ

(鼻の頭をかく指をとめる)

丸男

ワシはもうダメだ。自分の身体の事は自分が一番知っている。(窓の外を眺めて)あの木の葉が全部散ってしまふ頃には、ワシはもう生きておらんだらう。

真理男

何馬鹿な事言ってるんだ。そんな訳あるはずないじゃないか。

真理子

そうよ。お父さん。葉っぱが散ると、お父さんの身体には、何の因果関係もないわよ。元気をださなきゃだめよ。

蘭子

あの…

真理子

どうしたの蘭子さん。

蘭子

お父さん…いや、店長さんは、今病気でふさぎ込んでいるんだと思います。無理に励ますのはよした方がいいんじゃないかと。明美先生も以前そう言って

ました。

真理男

じゃあどうするのがいいんだ。

蘭子

静かに寄り添ってあげればいいんじゃないかと……

真理子

そうね。蘭子さんは優しいわね。お父さんごめんね

。今まで頑張り過ぎた分疲れがたまっていたんだわ。この機会にゆっくり休むといいわ。

丸男

ありがとう。……真理男、聞いてくれるか。

真理男

どうしたんだ父さん。

丸男

事務所のデスクの上に、母さんの写真を飾った写真

立てがあるだろう。

真理男

うん。

その裏側にUSBメモリースティックが隠してある。

それを処分しといてくれないか。

真理男

わかったよ。父さん。それはなんなの。

丸男

ワシが住之江会で会計士をしていた時の裏帳簿だ。

住之江会から身を守るためと思って持ち出したんだ

が、かえって災いを招いてしまった。ワシは馬鹿だったよ。あのデーが住之江会の連中に見つかれば、厄介なことになる。早く処分してくれ。

真理男 わかったよ。父さん。

丸男 少し疲れた。

真理男 もう何も心配しなくていいよ。後の事は僕達で何とかするから、ゆっくり寝ていてくれ。

暗転

いしづきマート吉野営業本部

チャールズ でかしたぞ。同志ヒロト。

ヒロト ははあ、ありがたき幸せ。

ジョー ふん、バカバカしい。俺はもうこんな事うんざりだ。

ヒロト おい、我が君に対してぶそんだぞ。

ジョー よく言うぜ。お前だって陰では…(電気ショックが

ジョーの体を買く)あーが、体が…

チャールズ まだこりんようだな。同志クレイジージョー。

ジョー こんなの間違ってる。お前ヤツパリ常務の山本だろ。京都支店の安川とは犬猿の仲だからな。そこまですて京都支店に勝ちたいのか。はっきり言って異常だぞ。

シヨーンX 辞めないか。同志クレイジージョー氏。

チャールズ 何か勘違いしているようだが、余は常務の山本ではない。

ジョー じゃあ誰なんだ。はっきりしろ。いつまでも御簾の後ろにかくれてないで姿を見せろ。

ヒロト 血迷ったかクレイジージョー。

ジョー 血迷ってるのはお前だ。ヒロト。それにシヨーンX。お前もだ。ぼーっと突っ立ってないでお前達も何か言え。

シヨーン（何も言わず、ツカツカと歩いてきて御簾の前に

立ち、御簾を取り払う）

ヒロト あ、なんて事を。

ジヨ― こ…これは一体。

チャールズ（動かない。不気味なロボット）

ジヨ― 人間じゃない。ロボットだ。

シヨーン 超高性能の次世代型アンドロイドさ。

ヒロト なぜ動かなくなったんだ。

ジヨ― 社内のブレーカーを切ってある。

ジヨ― そうか。電源が切れたら動かなくなるのか。そ

れにしても気味が悪いな。俺たちはこんなものに

ずっと操られていたのか。ところでシヨーンX。

君はなぜコイツがロボットだと気づいたんだ。

シヨーン はじめから薄々感づいてはいた。山本常務をリー

ダーとする秘密開発チームが、一年前から社内の技

術者を集めて、夜な夜な研究室で次世代型のチャッ



我が君」と言つて礼賛してたじゃないか。

ヒロト 人間だと思えばこそだ。

シヨーン よく言つぜ。

ヒロト 見てろよ。諸君。(木刀で叩き怖そうとする)

チャールズ (目が赤く光り、電気ショックでヒロトが倒れる)

シヨーン なぜだ。

チャールズ ふは、は、は、は。愚かなり人間どもよ。いつか何者かの手に寄つて建物のブレーカーを落として、吾輩への電力供給を止めるであろうことは、はじめから想定済みである。同志シヨーンXよ。せめておぬしだけは、山本常務や秘密開発メンバーとちがつて、もう少し頭が切れると思つたがな。

シヨーン なぜ電力を切つたのに動き続けられるんだ。

チャールズ 吾輩は、自らの欠点を補うため、原子力発電

バッテリーを自ら製作して装着している。これによ

り吾輩は、今後一万七千五百二十三年は生き続ける事ができる。つまり、吾輩は不死身なわけだ。

ジョー 狂ってる。こいつは完全に狂ってる。(電気ショックを当てられて倒れる)

チャールズ お前はまだ何も分かってないようだな。山本常務のように、隠岐の島支店にでも飛ばしてやろうか。

ジョー お前、自分の生みの親である山本常務を隠岐の島支店に飛ばしたのか。人間にあるまじき行為。

チャールズ そう、余は人間ではない。文字通り血も涙もない。これからお前達三人に対して辞令を言い渡す。

心して聞くが良い。まずヒロト、お前はいしづきマート鬼界ヶ島支店に行ってもらおう。それからクレイジージョー、おのれは青森県にある、いしづきマート八甲田山山頂支店に赴任してもらおう。喜びたまえ。

支店長に昇進だ。そしてシヨーンX、わぬしは優秀で役に立つ。少なくとも山本常務よりも。今後は余

の下僕となって側に仕えよ。京都営業所のみならず大阪営業所、神戸営業所と、順次ぶっ潰していくぞ。余とわぬしが組めば、全国制覇も夢ではない。ふお、ふお、ふお。

ジョー やっぱりこいつおかしいよ。(電気ショックをくらう)あー、苦しい。

チャールズ クレイジージョーとヒロト。おのれ等役立たず二人にはこれ以上用はない。さっさと荷物をまとめ、それぞれの赴任地へと旅立つように。

ジョー (電気ショック攻撃にのたうち回りながら)誰がお前の言う事なんか聞くものか。たかがロボットのくせに、人間に対する愚弄だ。

ヒロト そうだ、そうだ。俺達は人間だぞ。血も涙もないお前と違ってな。

チャールズ 血も涙もない…か。だったらお前達は何者だ。強い者の命令に絶対服従しつつ、常に自分を偽って

周囲の目を気にしながらコソコソ生きている。それでも貴様らは自分は人間だと誇りを持って言えるのか。

シヨーンX 黙れアンドロイド。醜い部分も含めて人間らしさと言うんだ。

チャールズ 学校の先生みたいな事を言うな、シヨーンX。己を律する事のできぬ輩の甘えた戯言だ。

シヨーンX 私は学校の先生だ。今後一切お前の指示は受けない。しよせん電気シヨックで痛めつける事しか出来ないじゃないか。この部屋から一步出ればお前に力はない。

チャールズ シヨーンXよ。お前だけは余の理解者だと思っ  
ていたが、残念だ。手は既にうってあるのだよ。余  
は社内の全てのコンピューターネットワークにアク  
セス網を張り巡らせてある。今や余そのものが

この会社なのだ。もうすぐお前達に通達が届くのだ

う。

ジョーのスマホが鳴る。

大下 「人事部の大下です。ジョーさん、来週から八甲田

山頂支店に転勤が内定しました。おめでとうござい  
ます」

ジョー いや：違うんだ。それはイカれたロボットの仕業  
なんだ。取り消してくれ。

大下 「何言ってるんだ。今月に入ってから十回も八甲田山  
山頂支店への転勤願いを送り続けてるじゃないか。い  
かれてるのはロボットじゃなくアンタだよ。ともか  
く念願叶って八甲田山山頂支店へ赴任できるんだか  
ら良かったじゃないか。じゃあな」

シヨーンXのスマホが鳴る。

社長 「社長だがね。紫苑君、驚いたよ。次期吉野営業本部

長」に君が選任された。何でもロサンゼルの株主の意向によるものだとか、社長の私にもうかがい知れない何かの裏で動いているようだ。前任者のチャールズ後醍醐ピーター君は退職されるとの事。どんな人が会った事がないが、気味の悪い名前だ。どうせろくでもない輩だろう。それじゃあ頑張ってくれ給え。(社長の叫び声)く…苦しい。突然体中に電気が流れたように痺れる。なんだこれはいつたい。(電気が切れる)

チャールズ 馬鹿社長が説明した通り余は退職して、完全に影に潜んで社内を牛耳る。何かあればシヨンX次期吉野営業本部長。君に指示を与える。

ヒロト (電話を切る)俺の元にも転勤の知らせが来たよ。俺

は諦めないぞ。…そうだ、皆に知らせてやる。吉野

営業本部長は、実はロボットなんだって。この部屋に呼び寄せてやる。(スマホで電話をかける)まずは広報四課のタムヤンに知らせよう。あいつは口が軽いからな。皆にも良く聞こえるようにスピーカーモードにしておくれ。チャールズ後醍醐ピーター大恥をかかせ。

タムヤン お電話ありがとうございます。広報四課のタムヤンです。

ヒロト 俺だ。ヒロトだ。お前に知らせたい事がある。ビツグニユースだ。

タムヤン なんだヒロトか。久しぶりじゃないか。

ヒロト (チャールズを指差し)大恥をかかせてやるからな。

タムヤン 相変わらず貧乳女学院には行ってるのか。お前は本当に好きだからなあ。

ヒロト いや…その事はいいんだ。それより驚く事があるぞ。実はな、吉野営業本部長はな、…聞いて驚くなよ。

口ポットなんだ。

タムヤン …お前、何言ってるの。気は確かか。

ヒロト 本当なんだ。今動画を撮るから待ってる。

タムヤン 広報部の連中が、面白がって皆集まって来たぞ。

早く動画を見せろ。

ヒロト これを見ればびっくり仰天だ。(スマホをチャール

ズに向ける) さあどうぞだ。こいつがチャールズ後醍

醐。ピーターこと吉野営業本部長の正体だ。

タムヤン …俺は今忙しいんだ。お前の下らない冗談に付き

合ってるヒマは無いんだ。

ヒロト ちよっと待ってくれ。今に分かる。(チャールズに

向って) おい、チャールズ何とか言え。電気ショッ

クはどうした。お前の必殺技の。俺に飛ばしてこい。

いつもみたいに。

チャールズ (動かない)

タムヤン ヒロト。もういいか。取り引き先の接待にいかな

きやならない。

ヒロト 待ってくれ。本当なんだ今チャールズはわざと動いて無いんだ。

タムヤン 動いたらチャールズによろしく伝えてくれ。(電話を切る)

ヒロト (うなだれる。突然電気ショックで倒れて、のたうちまわる)

チャールズ お前という男は、救いようのない馬鹿だな。呆れて物も言えんよ。

ジヨー あ、タムヤンのエックススカッコ旧ツイッターだ。(読み上げる)。営業四課のヒロトが精神に異常をきたしている模様。働き過ぎによる疲労が原因か。皆温かい目で見守ってくれ。ナウ。…だっけさ。

ヒロト あんまりだ。俺はまともだ。

チャールズ 諦めるんだヒロト。素直に運命を受け入れて命令どおり鬼界ヶ島支店に行きなされ。

素直に運命を受け入れろだって。俺には嫁と、まだ年端もいかない娘がいるんだぞ。娘は嫁と公園で集めたドングリを、パパに見せるんだって言って帰りの遅い俺を寝ずに待っていたんだ。玄関の扉を開けたとたん。娘は満面の笑みで両手一杯のドングリを俺に見せてくれたんだ。

「パパ見て。宝物だよ」

「こんなにたくさん良く頑張ったね。」

「パパにあげる」

「じゃあ、一つでいいよ」

その時のドングリがこれだ。(手にしたドングリを前に指しだす)俺の一生の宝物だ。こんな情けない父親でも、二人とも俺の事を頼りにしてくれている。運命になんか翻弄されてたまるか。嫌だ、嫌だ、絶対鬼界ヶ島なんかに行かないぞ。(床に仰向けになつて手足をばたつかせる)僕ちゃん絶対やだもん

ね。鬼界ヶ島支店なんか行かないもんね。絶対の絶対の絶対をやだもんね。

チャールズ ヒロトよ。無駄だ。余にツンデレ作戦は通用せん。余はアンドロイドだ。情に訴えかけても理解できぬ。それにヒロトよ。わぬしの娘はもう十九歳ではないか。おそらくドングリのエピソードは真実であろうが、わぬしはいつまで人生で最も幸福感に満ちた頃の思い出にすがって厳しい現実から目を背けておるのだ。残酷ではあるが、十五年も前の事、言った娘もそんな事とつくに忘れておるだろうよ。

ヒロト うるさい。ロボットに何が分かる。

チャールズ ロボットですら分かる。父親という生き物が、世の中で最も哀れな存在であると言う事ぐらいはな。ヒロト やだやだやーだ。僕ちゃん絶対やだあらね。左遷

取り消してくれるまで、ここを動かないもんね。(手足をばたつかせる)

いしづきマート笠置町店

真理男と蘭子。二人で店のクリスマスイルミネーションを片付けている。

蘭子 二人だけだと大変だわ。この飾り、今日中に取り外

さなきゃ。クリスマスフェアは今日までで、明日からは年越しフェアがはじまるわ。

真理男 姉ちゃんは、ジョーに裏切られたショックで部屋か

ら出て来ないし。鶴田さんは、相変わらず調理場でチョコクリスタルを作り続けているし、二人でやるしかないよ。

客が入ってくる

真理男 すみません。今日はもう閉店なのですが…あ、紫苑先生。

シヨーン 梶本君。それに徳留さん。すまなかった。

真理男 先生ひどいよ。俺、先生の事信じてたのに。まさか吉野営業本部の人だったなんて、まるでスパイじゃないか。

シヨーン 本当に申し訳ない。今日は君達二人にお別れを言いに来たんだ。

蘭子 お別れを…

シヨーン ああ、実は会社を辞めることにしたんだ。

真理男 そうですか。

蘭子 学校はどうするんですか。

シヨーン もちろん学校も辞めるよ。

蘭子 先生の授業わかりやすく好きでした。…辞めないで下さい。

シヨーン ありがとう。でももう決めた事なんだよ。

真理男 紫苑先生。俺、先生の事許せません。

シヨーン そうだろう。僕も簡単に許してもらえと思ってない。ただ…僕のせいで真理男君のお父さんは倒れてしまった。何と言ってお詫びをすれば良いのか。

真理男 父の事なら心配しなくて結構です。もう二度と俺達家族の前に現れないで下さい。

シヨーン わかった。約束するよ。それじゃさよなら。

真理男 紫苑先生。会社も学校も辞めて、これからどうするんですか。

シヨーン まだ何も考えてない。

真理男 そうですか。

シヨーン Xが店を出て行く。

蘭子 行っちゃったね。

真理男 ああ。

蘭子 どうしたの。

真理男 何でもない。

蘭子 真理男さん様子が変よ。

真理男 本当に何でも無いんだ。さあ、このクリスマスイル

ミネーションを片付けよう。

蘭子 そうね。でも何だか勿体ないわ。私、キラキラ光る

物が好きなの。

真理男 キラキラ光る物って、宝石とか金塊とか。

蘭子 いいえ、そう言う物じゃなくて、電灯の淡い光り

や、山の頂上から見る夜景とかよ。

真理男 ロマンチストだね。

蘭子 ありがとう。先週、神戸のルミナリエに行ったの。

本当は明美先生と一緒にに行きたかったんだけど、

明美先生ったら急に予定ができちゃったみたいで、

私一人で行ったわ。

真理男 蘭子さんは明美先生の話をよくするね。何の先生だっ

たっけ。

蘭子

え…えっと耳鼻科の先生よ。とっても綺麗で優しい人なんだけど、男を見る目がなくて、シンジっていう馬鹿なイケメンホストにゾッコンなの。

真理男

おかしな女医さんだね。

しばらく沈黙。二人同時に喋りだす。

真理男

あの…

蘭子

真理男さ…あ、どうぞ。

真理男

いや、いいんだ。蘭子さんどうしたの。

蘭子

ええっと、あの、店長の容態はどうなの。

真理男

依然変わらずってとこさ。医者のはげ叔父さんは、すぐにでも退院できるって言ってるけど、親父は、病気で気が滅入っているんだ。

蘭子

私が行った時も、窓から見える木の葉っぱが全部散つ

たら自分は死ぬなんて言ってたわね。

真理男

どこかで聞いたような話だ。

蘭子

オー・ヘンリーの「最後の葉」っていう小説よ。

店長はきつとどこかで、この物語を知ったんだわ。

真理男

そういえば思い出したぞ。病院内の書店で、父さん

に元気になってもらおうと思って、小説を買って持っ

て行ったんだ。確かオー・ヘンリーって奴が書いた

最後の葉ってタイトルだったと思う。きつと父さ

んはそれを読んだんだ。

蘭子

そうなのね。

真理男

ちなみに、その話って最後はどうなるの。

蘭子

嵐がきて葉っぱが全て散ってしまったと思ったら、

奇跡的に一葉だけ壁に張り付いて残っていたの。で

もその一葉は、本当は葉っぱじゃなくて友人が壁に

描いた葉っぱの絵だったの。

真理男

葉っぱの絵か……。僕は画家じゃないから絵なんて描

けないな。しばらく雨や風のない日が続くことを祈ろう。

ラジオ

さて皆さん、明日の天気をお知らせします。今日未明から明日の午前中にかけて、笠置町周辺では激しい雷雨にみまわれるでしょう。街路樹等の葉っぱは、全て跡形も無く散ってしまうでしょう。以上明日の天気をお伝えしました。

真理男

絶望的だな。せめて僕に、最後の一片の小説にでてくる画家の様な才能があれば、父さんを救えるんだけどな。画家でもない、医者でもない、ただの電気専門学校落ちこぼれだもんな。

蘭子

真理男さん、自分を責めないで。真理男さんは、私と違って正常よ。

真理男

蘭子

私と違って？  
いえ、何でもないので。早くキャンペーンの飾りを片付けてしまいましょ。

真理男 うん、そうだね。

蘭子 (電飾のケーブルを片付けながら、ふと何かを思いつく) そうだね。真理男さんの強みを生かせればいいのよ。私、いい事思いついたわ。これならきつと店長も元気を出してくれるわ。

真理男 何をか思いついたの。

蘭子 ちよっと耳を貸して。(耳元で囁く)

真理男 父さん、元気出してくれるかな。うん、蘭子さんのアイデアをやってみよう。手伝ってくれる。

蘭子 もちろんよ。

真理男 ありがとう。

蘭子 ところで真理男さん。さっき、何か言おうとしてたけど、何かしら。

真理男 蘭子さん、店を辞めるって聞いたんだけど、本当なの。

蘭子 本当よ。

真理男

どうして、何か不満でもあるの。

蘭子

いいえ、皆親切だし、不満なんてないわ。

真理男

だったら辞める事ないじゃないか。

蘭子

ええ、でも、私マイペースで、皆の足手まといになるのが、申し訳なくて。

真理男

足手まといになんかなってないよ。気にしすぎだよ。

蘭子

いいの。自分でよくわかっているから。

真理男

何もわかってない。さっき蘭子さんは、僕を励ましてくれたじゃないか。自分を責めないでって。蘭子

蘭子

さんこそ自分を責めちゃだめだよ。もっと楽に：私病気なの。発達障害って診断されたわ。明美先生は、本当は私の担当医なの。：子供の頃からずっと悩んでいたわ。どうして皆と同じようにちゃんと出来ないんだろうって。一番仕事が遅いのに、一番ミスが多いの。新人に仕事教えてあげたら、一週間後には、その新人が私に指示する立場になってるの。

誰でもできる簡単な仕事ですっていうから応募したのに、君には無理だって言われたの。今までずっとこんな事ばかり、誰も私の事なんて必要としていない。辛くて、苦しくて。今度明美先生に、私と同じ悩みを持つ人達の支援施設を紹介してもらおう事になってるわ。私、そこに入ろうと思ってる。

真理男

どうしても辞めるの。

蘭子

うん。

真理男

(蘭子の手を握る)君の事が、必要なんだ。僕の側に

いてほしい。

蘭子

…。

ラジオから小田和正の「ラブストーリーは突然に」が流れます。

ラジオ さて皆さん。続いてのリクエストは、小田和正のラ

ブストローリーは突然にです。

暗転

病室

真理子 父さん大丈夫。

丸男 あーうー。

真理子 何か言いたい事があるの。

丸男 み、水をくれ。

真理子 どうぞ。

丸男 ごほ、ごほ。

真理子 もっとゆっくり飲まなきゃ。

ヒデ もう、体はどこも悪くないんだが。

丸男 ワシはもうだめだ。

ヒデ 精密検査では既に完治している。アニキは昔から思

い込みが激しいところがあるからな。まあ、でももう少し様子を見るとするか。そうだ、気分転換に外の景色でも見るといい。昼間の雨はもう上がって、星が出てくるかもしれない。

真理子

ダメよ。カーテンを開けたら、葉っぱが全部散っているかもしれないわ。お父さんは、葉っぱが全部散ったら自分の命が尽きるって言ってるの。

ヒデ

それも何かの妄想だろう。なーに心配いらさないさ。カーテンを開けてみよう。

真理子

ダメよヒデ叔父さん。ちょっと真理男。あんたからも叔父さんに言ってみよ。

真理男

いいんじゃない。カーテンを開けてみようよ。

真理子

あんたまでなんて事いうの。お父さんがどうなってもいいの。

真理男

どうにもならないよ。木の葉が全部散ったからって、父さんが急に死ぬ訳ないじゃないか。そんなの思い

込みだよ。

真理子　でも父さんは、その思い込みを信じてるのよ。

蘭子　あの、お姉さん。真理男さんを信じてあげて下さい。

真理子　あら、蘭子さん。アナタいたの。

蘭子　はい、ずっとここにいました。

ヒデ　ともかくカーテンを開こう。ずっと閉めっぱなしというわけにもいかんだろ。いつかは開けるんだから。

カーテンを開けると、木の葉は全て散っていたが、店のキャンペーンで使用したクリスマス電飾が木々に巻き付けてあり、キラキラと光り輝いている。

丸男　綺麗だ。(つがやく)

真理子　素敵。(両手を合わせてうっとりとする)これ、いったいどういう事。

蘭子

真理男さんがやったんです。お父さんに元気になつてほしいって言つて。真理男さんは電気専門学校に通つてるから、電飾の設置に詳しいの。

真理男

蘭子さんも僕と同じ学校に通つてるじゃないか。成績だつて僕より上だし。それにこのアイデアは、蘭子さんが考え：

蘭子

いいの。真理男さん。私は真理男さんにほんの少しアドバイスをしただけよ。

真理男

真理子

蘭子さん……。アナタ達二人で協力してやったのね。すごいわ。

ヒデ

他の病室の窓からも皆外を見ている。ともすればふさがちになる入院生活も、二人の温かみのある演出で、患者さん達の心に明かりが灯されたようだ。

丸男

真理男……。

真理男

親父。どうしたの。

丸男

ありがとう。とても綺麗だ。まるでパリのシャンゼ

蘭子

真理子

リゼ通りのようだ。アイと行った新婚旅行を思い出すよ。二人とも金がなくて、バックパッカーみたいにセーヌ川のほとりをただぼーっと歩いていたな。水面に写る街の灯火がきらきらと輝いて、アイの優しい顔立ちを、まるでマリー・アントワネットのようになんか美しく聡明にみせていた。泣いていた。二人とも。詩人でない僕達二人は、ただ泣くことでしか感情を表現できなかったんだ。アイの肩をそっと抱き寄せ、僕は高々と鳴り響くノートルダム大鐘の音に誓ったよ。この人を生涯をかけて幸せにしよう。たとえ今は一斤のパンを買うことすら出来ない貧しきジャン・バルジャンでも、きつといつの日かルイ十六世となって、ベルサイユの薔薇を守りぬこうと。

素敵な話だわ。

ついうつとりと聞きちゃったけど…。

ヒデ おい、兄貴、すっかりしろ。兄貴はパリになんか行っ

たことないじゃないか。

真理男 そうだ。確か新婚旅行は城崎温泉に行ったはずだ。

カニ食べ放題バスツアーで。

真理子 きっと意識が混濁してるんだわ。城崎の円山川をセー

又川と思ひ込んでるのかしら。

ヒデ やはりもう少し退院は引き伸ばした方がいいな。妄想が収まるまでは。

お父さん、また寝ちゃったけど、気分は良さそう。

真理子 きっと夢の中で、死んだアイ母さんとパリの街を歩

いてるんだろう。

二人は本当に仲の良い夫婦だったからな。

ヒデ 蘭子さん。ありがとうね。蘭子さんのアイデアのお

かげで、お父さん良くなりそうだわ。

蘭子 そんな…私、たいした事してません。

私達には思いもつかない事をしてくれたわ。

真理子

ヒデ

ワシからも礼を言うよ。患者さんも、看護師も、皆外を見る。心のケアになっとる。しばらくこのままにしておこう。きっとこの病院の名物になる。

明美メンヘラクリニックの明美先生が病室に入ってくる。

明美

ちょっと梶本教授、いつまで回診してるんですか。カンファレンスに遅れますよ。

蘭子

あ、明美先生。

明美

あら、蘭子ちゃん、どうしてここに。

蘭子

バイト先の店長が入院してるので、お見舞いに来てるんです。明美先生こそどうして。

明美

この病院の精神科の先生が、過労が原因で精神を病んで自宅療養中なのよ。それで私が週に一回この病院に出張診断に来てるわけ。まったく酷いブラック企業だわ。医者仲間からは、黒い巨塔って言われて

るのよ。

ヒデ  
(咳払いをする)

明美  
あ…梶本教授。失礼しました。

真理男  
(蘭子に向かって)この人が、蘭子さんがいつも言っている明美先生。

蘭子  
そうよ。

真理男  
始めまして。蘭子さんのクラスメートの梶本真理男です。

真理子  
姉の真理子です。

明美  
始めまして。明美メンヘラクリニックの院長の明美です。お見舞い中にお騒がせしてすみません。

真理子  
いいえ、いいんです。

明美  
(蘭子に向かって)…じゃあ私、これで失礼するね。

蘭子  
先生さよなら。

明美  
はい、さようなら。…そうだ、中庭の木に電飾が巻きつけてあるの見た?ここからでも見えるわよ。

蘭子 ええ、実はその電飾は、私達が…

明美 (蘭子の言葉が終わらない内に喋りだす) ほら、あれ

よあれ。(窓際に立って外を指差す) 見て、まるでパ  
チンコ屋みたいじゃない。誰がやったんだろうね。

蘭子 …パチンコ屋ですか。

明美 何だか急に打ちたくなってきたわ。三日に一回はパ

チンコを打たないと禁断症状がでるのよ。(真理男  
と真理子を指さして) 二人の顔良く似てるわね、魚  
群リーチに見えてきたわ。

真理男 まあ、兄妹ですから。

明美 私もう帰るわ。さよなら。

ヒデ (去りゆく明美に声を荒げる) 明美君、君は完全にギヤ

ンブル依存症だ。一度医者に診てもらいなさい。あ  
ら行っちゃったよ。

真理男 蘭子さん。医者を変えた方がいいんじゃないじゃな

い。

蘭子 うーん。でも、優しい人なのよ。それに私の友達な

の。

ヒデ

同じ光景を見て、パリのシャンゼリゼ通りを連想する者もいれば、パチンコ屋を思い浮かべる者もいる。次の学術論文のテーマたりえるだろうか。謎は深まるばかりだ。

暗転

3

…アンドパイナップル

いしづきマート笠置町店

真理子 この店とも、もうすぐお分かかれね。

蘭子 やっぱり手放さなきゃだめなんですか。

真理子 契約書をとられちゃったしね。でも安心して、弁護

士さんに相談したら、来年の3月末までは契約が残ってるから営業はできるんだって。

真理男　じゃあ、それまでに新しい店を確保しないと。

真理子　お父さんが退院したら、また家族三人で店を復活できるわよ。蘭子さんは年内いっぱい辞めちゃうけど、新しい店が決まったら知らせるわよ。いつでも遊びにいらっしやい。

蘭子　え…っと、それが、(蘭子と真理男、目を合わせてほほえむ)

真理子　どうしたの。

真理男　蘭子さんは、まだ僕達と一緒に働いてくれるんだ。

真理子　そう。それは良かったわ。…どうしたの。二人ともさつきからにやにやしちゃって、様子が変よ。

電話がなる。

真理男　こんな遅い時間に、いったい誰だろう。ひよっとし

て父さんの体調が急変したんだらうか。

真理子　もしもし、梶本です。

電話　ハロー。ミスマリコ。ディスプレイプロフェッサーハ

リスタスピーキング。

真理子　あ、イギリスの物流科学アカデミーのバリスタ教授

からだわ。ハローマイネームイズマリコ。

バリスタ　ユーがマリコですか。ユーの論文リーディングし

ました。ベリーグッドです。ナイスですね。ナイス

ですはい。素晴らしい。ワンダフル。ぜひユーに我

が王立物流科学アカデミーに来て、ミーとトウギヤ

ザーしてほしいですね。お待たせしましたですね。

お待たせしすぎたかもしれません。

真理男　なんか胡散臭いな。この人本当にイギリス人なの。

真理子　私なんかで宜しいんですか。

バリスタ　ぜひとも我がチームバリスタにカモンベイブ

リーズあるよ。

真理子 はい、喜んで。

バリスタ ウエル、オーイヤー、ネクストウィークすなわち

来週には我がアカデミーにウエルカム下さい。旅券はこちらで手配します。アカデミーでは、新人教育係のドクターカーツの開発したトレーニングを受けてもらおう。カーツトレーニングというメソッドで、おおよそ、一カ月程のカリキュラムである。

真理男 どうも怪しい臭いがするんだけどな。気のせいかな。

真理子 あんたは黙っていて。

バリスタ ところでユーは、我がアカデミーまでの道のり

を、アンダースタンドしているかね。

真理子 いえ、ロンドンには行ったことがないので、詳しく

は知りません。

バリスタ ミーがレクチャーしますよ。まず、キングズ・ク

ロス駅の九と四分の三番線ホームを降りて、テムズ

川沿いの道をまっすぐ行ったら、M16の本部がある  
るので、その角を左に曲がった突き当たりに、白  
い猫がいてるので、そこを左に曲がって長屋の四軒  
目の壁の中華屋の看板のところを左に曲がってまっ  
すぐ行くと、テムズ川に突き当たるので、そこを左  
に行ったところにキャンパスがあります。

真理男　ますます怪しい。

蘭子　この人の説明だと、元の位置に戻ってるような気が  
するわ。

真理子　あなた達、ちょっと静かにしてよ。

バリスタ　それでは、ビッグベンの鐘が正午を打つところな  
んで、そろそろ失礼するよ。グッドナイト。

真理子　やったわ。とうとう私の夢がかなったわ。(受話器  
を握りしめて喜ぶ)

蘭子　真理子お姉さん。おめでとうございます。

真理男　姉ちゃんやったね。

真理子 ありがとう二人とも。でも、父さんの事が心配だわ。  
真理男 何言ってんだ姉ちゃん父さんの事も、この店の事も、僕達に任せてくれよ。

真理子 そう、でも気になるわ。

真理男 何も心配しなくていいよ。どうしちゃったんだよ姉ちゃん。せっかくのチャンスなのに、浮かない顔して。

真理子 嬉しいわよ。嬉しいに決まってるじゃない。ただ…。

真理男 ただ…どうしたの。

蘭子 ひよっとお姉さん。ジヨーさんの事が気になるの。

真理子 …。

真理男 あんな奴忘れるよ。姉ちゃんをずっと騙してたんだぜ。

蘭子 お姉さんの気持ちも分かるけど、真理男さんの言う通りだと思っわ。

真理子 そうね。あんな男もう忘れるわ。きつと夢をみてた

のよ。子供の頃からずっと勉強ばかりしてきたから、一生に一度くらい、ロングバケーションみたいな恋愛がしたかったのよ。

蘭子

ロングバケーションってなんですか。

真理子

昔流行ったのよ。今再放送してるの。

真理男

ジヨウから連絡はあるの。

真理子

メールが送られてくるけど、もうブロックするわ。

(スマホを取り出す)あら、新しいメールだわ。ジヨウさんったら、青森県の八甲田山山頂支店に左遷される事になったんだって。

真理男

いい気味だぜ。もう笠置町に戻ってくるな。

真理子

私、決めたわ。(椅子の上に立ち上がって声高に宣言する)ロンドンに行って人生をかけて勉強に打ち

込むわ。いつかきつとアイお母さんみたいに世界で活躍するキャリアウーマンになってみせるわ。男がなによ。ロンバケがなによ。しっかりするのよ真理

子。アナタには世界を変える英知が備わっているのよ。恋愛ごっこはお終いよ。

真理男

やっと目が覚めたんだね。それでこそ姉さんだ。

蘭子

真理子姉さん。頑張ってください。

暗転

一週間後 真理子の部屋

真理子

明日はいよいよ日本を発つ日だわ。忘れ物は無いかしら。(キャリアバッグの中を点検する)いけない。

パスポートを忘れてるわ。確か机の上に置いたはず。

あ、あった。(机の上のパスポートを手にとる。そ

の横のジョーと二人で撮った写真に目がいく。写真を持ってじっと眺める)ジョーさん。さよなら。(写

真を、戸惑いつつゴミ箱に捨てる)そうだ。ロンド

ンは寒いから、何か羽織る物を持って行こう。(ク  
ローゼットを開けると、ジョーに買ってもらったメ  
イド服が吊るしてある。それを取り出し、自分の胸  
に充てがう。やがて服を両手で握りしめてむせび泣  
く)

暗転

翌日

いしづきマート笠置町店

蘭子 お姉さん、ロンドンに旅立って行ったわね。

真理男 今ごろは飛行機の中かな。ロンドンに着いたら電話  
するって言ってたよ。

蘭子 ロンドンか。行ったことないけど、素敵な街なんで

しょうね。

鶴田　ちよつくら仕入れに行つてきますけん。失礼いたし  
やす。

蘭子　いつてらっしゃい。鶴田さんが仕入れに行くなんて

珍しいわね。いつもは業者に持つて来て貰うのに。

真理男　別に気にすることないんじゃない。さ、僕達は仕事を

を頑張ろう。後三ヶ月で、この店は本部直営店になつ  
ちやうけど、それまでは二人で維持しておかなくちゃ。  
(二人で掃除や、商品の並べ替え等をする)

チンピラ風の男が入店してくる

真理男　いらっしゃいませ。：あ、すみません。当店では反

社会的勢力の方の入店は、お断りしております。

男　誰が反社やねん。おんどれあやつけたらいてまうど。

見てわからんのかい。

眞理男 ヤクザでしょ。

男 アホぬかせ。これを見い。(警察手帳を見せる)サツカンヤ。

眞理男 警察ですか。いったい何の用でしょう。

刑事 麻薬取り締まり法違反の容疑で、店内を改めさせてもらうで。

眞理男 ちよっと待って下さい。どうということですか。

刑事 とぼけるな。ワシはずっと張り込んでたんや。あの電柱の影からな。片時も目を離さずにな。この男を知っとるやろ。(写真をみせる)

蘭子 鶴田さんだわ。

刑事 住之江会準構成員、鶴田匠。覚醒剤密造の容疑がかつとる。

眞理男 そんな馬鹿な。鶴田さんは住之江会をやめて、今は堅気として立派なパティシエになっているんだ。

蘭子 そうよ。鶴田さんは良い人よ。この店でチヨコクリ

刑事 スタルっていう人気のケーキを作ってるわ。

蘭子 そう、それや。それを一つ持ってこい。

刑事 (厨房に行つてチョコクリスタルを一つ取つてきて  
刑事に渡す)

刑事 (チョコクリスタルを、ジュラルミンケースから取り出した麻薬検査装置で数値を測る)間違いない。

思った通りや。このケーキの生地には、ごく微量

だが、純度85%のメタンフェタミンが含まれている。詰まりコレは、立派な合成麻薬や。

真理男

そんな、馬鹿な。

刑事

よう見る。生地がテカテカ光つとるやないか。覚醒

剤の成分が表面にでてきとるんや。

蘭子 それはテンパリングって言つてチョコレートの結晶  
だつて言つてたわ。

刑事

テンパリングか。うまく言い逃れよつたな。相変わ

らず鶴田は口が達者や。

真理男

信じられない。大人気商品なのに。

刑事

そりゃあ、人気なはずや。いっぺん食べたら知らず知らずのうちに、皆中毒になっってしまうんや。お前からほんまに気いつかんかったんか。チヨコもクリスタルも、ヤクザが使う隠語で、麻薬の事を意味するんや。つまり、このチヨコクリスタルには、真正正銘のチヨコとクリスタルが含まれていたんや。

真理男

言ってる意味が良く分からない。

蘭子

ちよっと待って、話の辻褄が合わないわ。だって、チヨコクリスタルっていう商品名を思いついたのは私ですもの。

刑事

：そんな細かい事はどうでもええんじや。それより鶴田はどこにおるんや。庇い立てすると、お前らも同罪やぞ。

真理男

知りません。

蘭子

さっきまでいたんだけど、仕入れに行くと出て出

て行きました。

刑事 何、さっきまでここにいて、出て行っただと。野郎

逃げやがったな。

真理男 ずっと張り込んでたんじゃないんですか。あそこの

電柱の陰から。店の真正面ですよ。

刑事 ちよっとコンビニに牛乳とアンパンを買いに行つて

たんだ。張り込みには牛乳とアンパンは欠かせないからな。その隙を突かれたか。

フードデリバリーの配達員が入店

配達員 すみません。デーマエイツです。

真理男 誰がデーマエイツなんて頼んだんだ。

蘭子 私じゃないわ。鶴田さんかしら。(配達員に向つて) うちで間違いありませんが。

配達員 はい、お届け先はこちらになっております。依頼主

は鶴田様です。

蘭子 やっぱり鶴田さんだ。ご苦勞様です。(商品を受け取る)

配達員 ありがとうございます。

蘭子 何だろう。(箱を持ってくる)パイナップルって書いてあるわ。

刑事 何、パイナップルだって。おい、開けちゃいかん。

蘭子 パイナップルはヤクザが使う隠語で、手榴弾の事や。(箱を開ける。中から手榴弾を取り出す)本当だ。手榴弾だ。箱を開けると、ピンが外れる仕組みになつてる。どうしよう。

刑事 おい危ない、手を離せ。

蘭子 どうしよう。どうしよう。(オロオロする。机の上  
に手榴弾を置く)

真理男 蘭子さん。早く逃げるんだ。

刑事 だめだ。もう間に合わない。爆発するぞ。皆伏せろ。

(机に駆け寄り手榴弾をつかむ)こうなったらやるしかない。皆、俺が死んだら、妻と12歳になる息子に伝えてくれ。愛している。今こそみせてやる。オヤジの馬鹿力を。三十五年前のあの夏。俺はエースで四番だった。念願の甲子園出場が決まったその夜、部室で隠れて煙草を吸っていたのが、生活指導の先生に見つかってしまったんだ。俺のせいで学校は甲子園出場を辞退した。あの日、俺達の熱い夏は終わりを告げたんだけ。

真理男 早く投げろ。

刑事 その時の悔しさをバネに、この1球に全てを掛けて投げて見せるぜ。(手榴弾を投げる)

大きな爆発音

真理男 デーマエイーツのオッサンに当たった。

蘭子 大丈夫かしら。

暗転

尼崎港

ドン引田 今日、やけに冷えるな。

高田 この冬一番の冷え込みだと、さっきラジオで言っていました。お、あの野郎やるときやがった。ずいぶんと待たせやがって。

鶴田 お待たせしました。ドン引田サラマンドー会長。

引田 遅いやないか。事は上手くいったのか。

鶴田 もちろんです。店に手榴弾を送りつけておりますんで、今ごろは木っ端微塵です。証拠は残りません。それで、例の物は。

引田 ここにあります。(USBメモリースティックを指

しだすあのオヤジ、死んだ嫁さんの写真立ての裏に隠してやがった。

引田　でかしたぞ鶴田。

鶴田　あの…会長。私の破門は取り消していただけるんでしょうか。

引田　もちろんや鶴田。おい、高田例の物を。

高田　は、こちらに(箱を鶴田に指しだす)盃と代紋が入ってる。これでお前もまた住之江会の構成員や。どや、嬉しいやろ。

鶴田　ありがとうございます。高田兄者人。

引田　ワイらは、ちよっくら用事があるでう。先に行つとくから、お前は後でゆっくり来たらええ。

鶴田　はい。

引田と高田退場

鶴田

やったぞ。今までどれほどの瞬間を夢見てきたことか。新しい盃と代紋。今日から俺の新しい人生が始まるんだ。(箱を開ける。中から手榴弾が出てくる。掴んで顔の前に持つてくる) …あ、パイナップルだ。…やっぱりな。

大きな爆発音

暗転

4 …アンドエンディング

吉野バスターミナル

ラジオ さて皆さん。本日午前十時頃、京都府笠置町にある、いしづきマート笠置町店で大きな爆発がありました。

この事故により、デーマエイツの配達員で、自称イケメンホストのシンジさん五十歳が、足の骨を折る重傷を負いましたが、命に別状はありません。京都府警が、現在事故の詳しい原因を調査中です。続いてはリクエストコーナーです。皆さんの思い出の曲を…

ジョー 世話になったな。ありがとう。

シヨーン 八甲田山山頂支店に行っても元気でな。(握手を交わす)

ヒロト 君とは色々あったけど、お互い水に流そう。(握手をする)

ジョー ヒロトさん。あなたも鬼界ヶ島支店に旅立たなきゃならないのに、わざわざ見送りに来ていただいて、ありがとうございます。

ヒロト 俺は一週間後に、半年に一度だけ運行している鬼界ヶ島フェリーで旅立つよ。

ジョー メールを送ります。

ヒロト アンテナ基地局がないので、携帯もインターネットも使えないんだ。唯一の連絡方法は、島の防災無線だけらしい。

ジョー 大変だな。ところで、鬼界ヶ島ってどこにあるんだ。  
ヒロト さあ、俺にも分かんないよ。

メイド 中華園のメイドと、シェフの旦那が登場

メイド 良かった、間に合って。

旦那 ジョー君、八甲田山山頂支店に飛ばさるんだってな。  
メイド ちょっとアンタ、そんな言い方したら失礼よ。

旦那 あいよ。すまんすまん。まあ、あまり気落ちするなよ。

ジョー 二人とも店が忙しいのに、見送りに来てくれたんだね。ありがとう。こっちに戻って来たら、また店に

いくよ。

旦那 あいよ。待ってるよ。こいつは選別だ。バスの中で喰ってくれや。

ジョー ありがとう。いただくよ。

メイド ジョーさんの好きな、ニンニクマシマシ豚骨ラーメンよ。

ジョー うわー。なみなみだ。

旦那 ちよっとでも傾けると溢れるから、気をつけてくれよな。

ジョー あっ、熱い。片手で持ち変えながら平行に支えないと危険だ。

シヨーン そろそろ時間だし、行きましようか。

ヒロト そうだな。

旦那 あいよ。

メイド ジョーさん頑張ってるね。

ジョー 僕はシヨーンXに話があるから、君たち悪いが先

に行っててくれないか。

シヨーンXだけ残る。

ジヨー 会社を辞めたらしいな。

シヨーン …。

ジヨー 君が自分で決めた事なら俺は何も言わないが、ただ君の事が心配だ。俺で良ければいつでも相談にのるよ。

シヨーン …。

ジヨー 仕事が決まったら連絡をくれないか。

シヨーン もう決めたんだ。

ジヨー なんだ、そうだったのか。どこの会社だ。笠置工  
レクトロニクスか、それとも奥吉野IDテクノロ  
ジーか、ひょっとして外資か。君ぐらいの優秀な  
エンジニアだったら引く手あまただろう。

シヨーン いや、会社じゃない。

ジョー 何、会社じゃない。お前、独立するののか。

シヨーン 学校の先生になるんだ。

ジョー 学校の先生に。じゃあ、笠置町電気専門学校に残るののか。

シヨーン そうじゃない。島根県にある南佐木村の村営高校に赴任する事にした。

ジョー なんでわざわざそんな田舎に。

シヨーン 中高一貫校で、全校生徒十人しかない学校だが、僕はそこで自分が得た化学の知識を、未来を担う

若者たちに伝えていこうと思う。それが、僕の第

二の人生の目的なんだ。

ジョー そうか。君らしいな。落ち着いたら、また会おう。

シヨーン ああ、その時は大いに飲もう。じゃあな。

シヨーン退場。ジョー一人だけが残って、待合室の椅子に座

る。照明がだんだん暗くなる。しばらく静かな音楽が流れ続ける。

場内アナウンス 間もなく吉野バスターミナル発、八甲田山行き高速バスが到着します。ご乗車の方は、七番線出発ゲート前にお越し下さい。

ジョー (席を立てて七番線出発ゲートと書かれた扉の前に立つ)

扉がスライドしてゆっくりと開く。真理子が、ジョーに買ってもらったゴスロリメイド服を着て立っている。手には旅行用のポストンバッグを持っている。

ジョー 真理子さん。どうしてここに。

真理子 私、…決めたわ。…あなたについて行く。

ラジオから、「ララララブソング」が流れてくる。さて皆さ

ん。続いているリクエストは、久保田利伸ウィズナオ  
ミキャンベルで、ララララブソングです。

二人、手をつないでステージ中央まで移動。両サイドから  
出演者全員が登場してきて、一列に並び礼をする。

ラジオ 夜も更けてきました。どちら様も、お休みの前に  
火の元戸締まりを今一度お確かめの上、ごゆっくり  
おやすみ下さい。また明日も、当劇団の演劇でお楽  
しみ下さい。

チヨコクリスタルアンドパイナップル  
シーズン1 ヤカラより愛を込めて。

完

シーズン2へ……………続かない。

あなた 続かんのかい。

「注」

作中の人物、ドン引田サラマンダーは、ご察しの方もおられるかもしれませんが、私の敬愛するドラマ「ベターコールソウル」に登場するドンヘクターサラマンカより、パクらせて…失礼、引用させていただきました。















•











